
とある二人は行動奪取[アウトパターン]

うい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある二人は行動奪取「アウトパターン」

【Nコード】

N6275T

【作者名】

うい

【あらすじ】

風紀委員と暗部が交差するとき、物語は始まる。

相手のやる気無くさせる（やる気どころか思考ごと無くさせる）能力『精神奪取』を持つ風紀委員の女の子、気惹勇里。そのパートナーである同じく風紀委員で時を止める能力『行動制限』を持つ穂波梨亜。

平穏だと思っていた日常は、とある少年の出現により崩れさることとなる。

風紀委員ですの！（前書き）

女の子ばかりです
のくせにバトル多いです

まあ、主人公が触れれば敵はアウト、という親切設計ですけどね

風紀委員ですの！

学園都市。複数の学区からなる、超能力教育機関が密集している場所である。だいたいの場所を書くとなると、東京だ。

超能力、と言っても現代に広まっている「スプーンを曲げる」や、「透視する」なんてレベルではない。

ある者は体中から電気を放ち、ある者は人の思考すらもコントロールする。

そんな能力が溢れているところだ。もちろん、その力を振りかざす輩も存在する。

だが、それを止めるための組織というのも存在していた。

一つは、教師たちが生活指導などを行ったり、守ったりする警備員アンチスキルというもの。

そして、そのもう一つの組織が――

「気惹きびき勇里ゆうり！ コンビニ強盗の犯人を捕まえました！」

ビルなどが建て並ぶ人気ひとけの多い場所で、ガタイの良い男が倒れており、それを片足で踏みつけている少女がいた。

髪は整えた、というよりもテキストにまとめたというのが自然なボサボサのポニーテール。そして、常盤台という名門中学校の制服を着崩はなしていた。

勇里は携帯を耳に当て、報告を済ませる。少しすると、トラックのような大きさの車が一台、少女―勇里の近くに停まった。

「いやあ、ご苦労様」

中から体を守るための防弾チョッキを着た大人が二人降りてきた。警備員だろう。そして、勇里の踏みつけている男を持ち上げてトラックに乗せた。男は微動だにしない。声はかろうじて出ているが、うめき声のようで言葉には聞こえなかった。

「やっぱり、精神奪取アウトレシジョンの異名は伊達じゃないね」

警備員の一人が振り返り、頭を下げた。勇里は手を振って、答えた。

「いえ、あたしの能力は触れた相手のやる気を無くさせるだけです
よ？ 強能力者レベル3だし……」

精神奪取。やる気を無くさせる能力なのは勇里が説明した通りだが、強能力者になると、問答無用で思考ごと切断する。あらゆる思考を無くさせることが出来るが、一つだけ。それも、具体的な「動くやる気を無くさせる」や、「戦おうとするやる気を無くさせる」というもの。新たに切り替えるためにはもう一度触れる必要がある。しかし、それを差し引いてもスゴい能力なのには変わりないのだが。

「いやいや、行動制限スカラーストップの娘と一緒にしなくても軽々とこなしちゃう君は、もう立派な風紀委員だよ」

「あ、ありがとうございます！」

今度は勇里が頭を下げた。警備員の二人は軽く手を振ると、動かない男を二台に丁寧に乗せて、トラックで走り去っていった。

ふいに、勇里の携帯が鳴りだす。今流行りの曲が流れだしてくるが、歌が始まる前に通話ボタンを押した。

「勇里ちゃん！ どうして先に行っちゃうんですかあ！？」

「あははは。ごめん、穂波」

アニメのような可愛らしい声ほなみりあを荒げて勇里の携帯にかけてきたのは、同じく風紀委員の穂波梨亜だ。勇里と一緒に活動をしていて、常盤台に通っているお嬢様らしいお嬢様、というところ。

彼女の能力は、行動制限スカラーストップ。スカラーといえば、ベクトルの一部に分類され、時間を表す。しかし、穂波の能力はスカラーというより

も、一次元や四次元のようなものを止めるため、正式にはスカラーというのは正しくない。研究者の間でも、演算の方式をいくら見ても分らないのだと言う。

「もう！ 勇里ちゃんはいつも一人で突っ走って！ 私もいるんですよ？」

「だからごめんってば！ んじゃ、今から風紀委員の支部に戻るね」
それだけ言うと、通話を切った。
彼女たちは、悪のために能力を振りかざす者を止めるための組織。
正義のために力を振りかざす。

風紀委員の物語である。

風紀委員ですの！（後書き）

R・Hの日記

お嬢様学校に進学できたのもあるけど、勇里ちゃんと同じクラスで
同じ部屋になれたことが一番嬉しい！

勇里ちゃんの下着姿が拝めると思うと……つつ、鼻血が。

今日の日記はこれぐらいにしておこうと。

レベル5？（前書き）

ちなみに、勇里たちは中学二年生です。

ちょうど、御坂美琴と同じ年ですね。

ほとんどがオリジナルキャラですが、原作キャラも織り交ぜつつ進めていきます。

レベル5？

風紀委員の支部にて。常盤台より、やや遠めな位置にあるのだが、勇里たちは人員上の問題でここに飛ばされたのだ。

通うのが面倒くさくなってきたているのだが、穂波というストツパのおかげか、なんとか続けられている。

特にやる事もなく、勇里は机に顔を伏せて寝ていると、穂波が肩を叩いて勇里を起こした。

「んっ、なあに？ 穂波……」

「もうすぐ寮に戻る時間ですよ！」

そう言つて、穂波は壁に掛けられた丸い時計を指差す。針は五時を通り越したところを差しており、もうすぐで六時になる位置だった。

勇里は慌てて跳ねおき、カバンを持ち上げた。

「ヤバイよヤバイよ！ 寮監に怒られるよ……！」

穂波の手を引っ張り、猛ダッシュで支部を飛び出した。

……。

常盤台の寮にて。

時間は六時の四十分。ギリギリだった。夏に近いため、まだ外は明るいのだが、寮の門限は変わらずに七時だ。

勇里は、頬を伝う汗を手の甲で拭う。すると、二階からドタバタと大きな足音が聞こえてきた。

「また貴様らか……！ 御坂に白井イイイイッ……！」

三角眼鏡よりも、更に目を三角に釣り上げた寮監が、階段を駆け下りる二人の女の子を追いかけていた。

だいたい勇里たちと同じ背をした短髪の女の子と、やや低めの背でツインテールの女の子だ。ツインテールの女の子はテレポートの能力なのか、短髪の子よりもだいぶ余裕な顔をしている。

三人は勇里たちの目の前を、眼中にないまま走り抜けていった。スカートと髪が、風にあおられたようになびく。

「な、なんだったの？ 今の……」

「短髪の女の子は、超能力者^{レベル5}の御坂美琴さんですよ。もう一人は風紀委員の白井黒子さん」

「へー、あんたって物知りだねえ」

「勇里ちゃんが知らなすぎなだけです」

穂波が大人しげな顔をムツと膨らませる。しかし、可愛い顔なおかげで怒っている感じが全く出ていないことを勇里は黙っておくことにした。

まだ怒鳴り声が聞こえることに二人は苦笑すると、寄り道もせず、に部屋へと戻った。

……。

お風呂の時間になった。

勇里は、シャワールームで肩から手首を、泡の付いたタオルで撫でるようにこする。右腕を止めて左腕を洗おうとした時、女の子二人の声がシャワーの音ごしに聞こえてきた。

「お姉様あー！！ わたくし黒子はお姉様の裸体を見ただけでっ！！」
「ギャー！！！！ 近寄るな変態！！」

複数のシャワー音の中でも聞こえるあたり、相当な声の大きさなのだろう、と勇里は推測した。次に、扉を無造作に開け放つ音と、女の子の悲鳴が聞こえて騒ぎは止まった。

「はあ。今年はやけに騒がしいねえ」

「去年は静かでしたからねえ。やっぱりお嬢さま気質の人ばかり集まるんでしょう」

その声の主は、隣で胸を洗っていた穂波だった。勇里にはシルエツトだけしか分らないが、それでも胸の大きさが尋常ではないのが伺える。

その大きな胸に苦い顔をしたあと、ようやく勇里は返事をする。

「お嬢さま気質ねえ。あたしなんかはお嬢様なんてガラじゃないけどなあ。どちらかと言うと、穂波の方がお嬢様らしいよ」

「ふふつ、隣の芝生は青く見えるんですよ。お稽古や作法をそつなくこなす勇里ちゃんの方がお嬢様っぽいです」

「そうかなあ。それにしては、あたしはレベル3。穂波はレベル4でしょ？」

勇里は、両腕をシャワーで洗い流し、次にガラスの棚に置かれた、リンスとシャンプーが二つ入っている「リンス・イン・シャンプー」というありきたりな名前のビンを持つ。

「いえいえ、偶然の産物ですよ、私は。研究者ですら理解できない演算方式なんて物を扱ってるんですから」

ゼリーのような触感がする液体を、長い髪に付け、無造作に掻き回す。みるみるうちに泡が立ちはじめ、真っ白なアフロのようになっている。

「偶然でも、穂波のは努力の成果じゃない？ あたしは努力なんて無理かなー」

勇里がレベル3なのは、いわば自然に起きたことだ。成長につれて、いつの間にかレベル3になっていた。努力もしていない。

しかし、穂波はレベル2を努力してレベル4にした。その差は大

きいだろう。

「努力しない人間に成果なんてありませんよ？　あの御坂美琴さんだって、低能力者^{レベル1}から努力して超能力者になったんですよ？」

「マジで！？　はー、そりやまたスゴい」

「でしょ？　だから、勇里ちゃんにだってチャンスはあるんです」

「あははは、レベル5なんて縁遠い話されても困るよ」

否定しているような声で返すが、穂波は軽くため息をついた。

穂波はいつも、勇里に努力しようと誘うのだが、そのたびに勇里は話をはぐらかしたり逃げたりする。

しかし、諦めの悪い穂波にとっては、意地でも努力してほしいのだろう。去年からずっと「努力しろ」と説教している。

勇里は髪に付いた泡を流し終わり、バスタオルを体に巻いて外に出た。穂波も少しした後に出てくる。

「お姉さまー、なんならわたくしが洗ってあげますのに」

「しなくていいわよ！」

帰ってきた時に、寮監に追いかけられていた背の低い女の子が、扉を叩いていた。治まったかと思えば、まだやっていたのだ。

周りの女の子は、その様子を不思議そうに見つめていた。穂波は別段おどろいた顔もせず、勇里に話しかける。

「勇里ちゃん。あの女の子ってレズなのかな？」

「さあ？　どうなんだろ。でも、こんなお嬢様学校にレズなんて…」

…」

「女子校ですよ。レズくらいいます」

「ほう。たとえば？」

「私とか」

「はあ？」

勇里はアホらしい声をあげて穂波を見つめる。少し顔を赤くしているようだが、そっぽを向いていて、よく分からない。

「い、今なんて」

「だから……、私もレスです」

「ええっ！？ マジで？」

「他にも、幼女を見ると興奮します」

「レスなうえにロリコン！？ 生粋きっすいの変態だ！！」

勇里が叫ぶと、背の低い女の子に注目していた周りの女の子たちが一斉にこちらを向き、ひそひそ話を始めた。

居心地が悪くなった勇里は、穂波の手を掴んでそそくさと着替え部屋に戻って行った。

能力の効かない少年（前書き）

お待たせしました！

昨日出す予定だったんですけど、間違えてリロード押しちゃいまして全部消えた（＾p＾）

から書き直しました……

今回はいつになく長いです

能力の効かない少年

次の日、勇里は朝の七時に起床した。目覚まし時計が鳴っているわけでもなく、自然に身についた習慣だ。

すでに開かれているカーテン。そこから日光が部屋をまんべんなく照らしている。起きたばかりの勇里にはその日差しが目障りで手で視界を覆った。

「うにゃ」

口を開くとよだれが垂れていることに気づき、寝相が悪いせいでクシャクシャになったパジャマの裾で拭う。

ここ、常盤台の寮は常盤台中学に通っている生徒が住んでいる所だ。お嬢様学校なせいか、寮の中でも規則正しい生活を義務づけられていて、勇里にとっては多少なりとも息苦しいものがある。しかし、一年も経つと人間とは慣れを覚えるもので、すっかり習慣づいてしまった。キチンとした生活リズムを取っているおかげで、時計を見なくとも何秒かの誤差程度で時間を言い当てられる。

ふと、勇里は穂波のベッドを見た。羽毛ふとんはキレイに畳まれており、シーツにはシワも無かった。比べて勇里のは、シーツの中からふとんははみ出ているし、シワだらけだ。更に細かく言つと、よだれで汚れている。本人から見ても嫌悪感を覚える光景に、勇里は心の中で穂波に謝罪した。

さて、お察しの通り、穂波はすでに起床していてこの部屋にはいない。規則正しい生活というもので、六時半ごろにはみんな布団を畳んでいるのだ。そして寝間着を直し、制服に着替え、食堂へと向かう。今は穂波たちが朝のホワイトシチューでも和やかにすすっていることだろう、と勇里は推測した。パジャマを脱いで、制服に着替える。上までボタンを留めるのが苦しい勇里は喉元のボタンを開けている。スカートは短めに履いているため、パンツが見えそうになることもしばしば。最後に館内用革靴を両足に履いて、扉を開け

た。

「行つてきまぶつ！？」

直後、誰かにぶつかった。

弾かれたように飛ばされ、尻餅をつく。相手側からも小さく悲鳴が聞こえた。不満の一つでも投げかけてやろうかと勇里は目を開けて、相手を見る。

「イテテ、あれ、大丈夫？」

短髪の女の子が同じく尻餅をついていた。スカートの中身が見えているが短パンである。

相手は先に立ち上がり、勇里に手を差し伸べた。勇里はそれに従い、相手の手を掴む。力とテコの要領という体育授業が役に立った。力をどこに傾ければ効率よく動けるか、というものだ。普通に立ち上がるより何倍も楽に、速く立ち上がることが出来た。

勇里はスカートを叩き、ホコリを落とした。相手の女の子も勇里の真似をしてスカートを叩く。なぜか吹き出した二人は、お互いの目をよく見た。

「ごめんね、ぶつかっちゃって」

「ううん。いきなり飛び出したあたしが悪いもの」

まるで旧来の友人のように親しげに話す二人。どこか似ている雰囲気がある。

女の子は何かを思い出したように「あっ！」と言うと駆け出した。

「じゃあねー！」

女の子が振り返って手を振ってきた。勇里も手を振り返す。女の子が曲がり角を曲がった直後、怒鳴り声が聞こえてきた。

指を顎にあてて、勇里は思案顔になった。なにか記憶に引っかかっているのだ。

「えーっと、たしか……」

喉まで出掛かっている、とはまさにこのことだろう。詰まったような感覚に苛立ちながら頭の検索エンジンをフル稼働する。

「こら待て御坂ああああああー！！」

寮監の怒鳴り声がここまでハッキリと伝わってきて、その怒声が引き金になる。

「そうそう！　そうよ！　常盤台の超電磁砲、御坂美琴！！」

せり上がった記憶が頭に染みるように浮かんでくる。穂波に超電磁砲の話が聞かされ、一緒に騒いでいたのが白井黒子という名前の女の子まで思い出した。

「お礼を言っていない！」

先ほどぶつかった時、無言で見送ってしまったのを更に思い出した勇里は御坂を追いかけるように曲がり角を目指す。

足にブレーキをかけて、まだ廊下の向こうを走っている背中を追いかけようとしたその時、

襟首を誰かに掴まれた。

フワツと浮かぶ感覚がし、次に背筋から冷や汗が吹き出す。そういえば、どうして御坂さんはあんなに必死に逃げてるんだろう、という考えの結論はすぐに目の当たりにすることとなる。

よく考えてみれば、あの時点でこうなることは予想できたハズだ。怒鳴り声が聞こえたあたりですでに分かるハズだったのだ。一時間前の自分を恨みながら、その場で固まる。

掴んだ手は親切にも向かい合わせになるように勇里を回してくれた。勇里の視界いっぱい、釣り上がった三角メガネよりも更に釣り上がった目が睨んできている。

「お、おはようございます。寮監様」

勇里は愛想よく挨拶をする。

対して寮監は、

「なにがおはようなものかつ！！　遅刻だバカモノっ！！」

……。

午後の授業も終わり、勇里たちは自分たちが勤める風紀委員支部に着いていた。

今は特に仕事も入ってなく、うだるような暑さなので勇里の姿はかなり大胆だった。胸のボタンは全開にされていて、肌がかなり露出している。しかし、滑走路にもなれそうなほど平面な勇里の胸なのでセクシーというには縁遠いだろう。穂波がしたなら別の話だが。その開けた胸を下敷きで煽り、暑さを凌いでいる。しかし、それも冷やかし程度にしかないほどの暑さだった。

「大丈夫？　勇里ちゃん」

ほえ、と息だけ吐いたような声をあげて、声のした方向を見る。そこには涼しげな顔をした穂波が立っていた。

「なんでアンタはそんなに暑くなさそうなのよ」

「扇風機がありますからね」

「はあ！？」

絶叫にも似た声をあげて穂波の肩を掴んだ。

「ああああ、アンタって人は！！　実の親友に黙ったまま扇風機つて！！」

「えっ？　だつて勇里ちゃん。去年は『来年は暑くなるらしいし、さつさと扇風機を買うわ！』って言ってたじゃない？　もうとつくに買ったのかと」

「い、言ったつけ？」

「言ったよ？」

勇里は表情が一瞬固まったが、すぐに扇風機の方方向に走って行った。

穂波の席には、やはり床に設置された扇風機があった。それも、今季最新作という名目でテレビCMによく出ているモデルだ。学園都市性だけに性能は外と比べ物にならない。去年には、イオンを排出しながら、電気を漏らさないことでホコリを出さずにクリーンな空気を送る物。または、クーラーと扇風機が合体した「冷風送機^{クーリングタクトイクス}」という物が一時期に流行るなどあった。しかし、冷風送機は寒すぎ

るうえに調節が難しく、体調管理が行いにくいことで生産を滞らせている。というように、扇風機という家庭用機にも最新の科学技術が織り込まれているのだ。

今、穂波が持っているのはリモコン式調節型扇風機と呼ばれる物で、クーラーの温度設定のように扇風機の羽のスピードが微調整できるようにした優れたものだ。大してすくなくように思える説明だが、回転速度の微調整などというのはブレーキを無駄にかけて電気を食うだけのハイリスクな機械だった。しかし、このモデルはそのブレーキを無くし、力を弱めることに成功したのだ。

ここまでがテレビで放送していた部分だ。力を弱めるというやり方ぐらい、勇里にも思いつきそうなのだが会社側はかなりハシヤいである。

勇里は扇風機に抱きつき、顔を扇風機に近づけて、

「あゝあゝ、せんぶうきだゝゝ」

と、声をブレさせ始めた。顔面一杯に風を浴びて、すっかり上機嫌になっている。日光とはおさらば！ と心で叫んだ。

突然、勇里の目の前、つまり扇風機の中に緑色の光が現れた。

「ひゃっ!？」

その緑色の光は徐々に平面的になっていき、蛍光掲示板のような物になった。そして、文字が並べられていく。

「第七学区にて、スキルアウトが事件を起こした？」

表示された内容を勝手に省略した勇里に、思わず穂波は吹き出した。

「仕事よ仕事」

そんな二人の背中に、ちょっと大人っぽい声がかけられる。勇里は扇風機から離れて、顔だけ声の方に向けた。

メガネをかけた知的美人、という感じの女性が椅子に座ってこちらを見ていた。名は峰合雀^{ミナツミ}。光の屈折を操り、平面的な掲示板を作り出せる光掲示板という能力の持ち主だ。自ら任務には出ず、支部からサポートをする立場にある後援能力を主にしている。

峰合は床を蹴って、椅子に付いた車輪で移動しながらこちらに来た。めんどくさがり、というのが二つ名なのは本人は知らない。

「とりあえず、それ行ってもらえる？」

第七学区は遠いから嫌、というのが本心なのだが、この人は何かにつけて「風紀委員は学園都市の治安を守る。それを掲げているのは我々であって、」という長話を始めてしまい、こちらのテンションを根こそぎ持っていく。逃げる術はまだ見つかっていないので、今すぐに対処法の一つなりでも教えてほしい心境だった。

もう一度、その仕事内容を確認すると、勇里は首を縦に振った。

「よし、じゃあ行つてらっしゃい。こっちは監視カメラなりで支援しとくからさ」

呑気なことを言いながら峰合を手を振る。無駄に上下するテンションのせい、か、勇里は「峰合さんはもしかしたら未成年飲酒をしているのでは」と疑っている。

峰合に見送られながら、勇里たちは支部を後にした。

……。

今、勇里たちは轟音を撒き散らす近所迷惑なバイクに乗っている。水素爆発を利用した非売品だ。何よりもその技術は荒っぽく、売るには批判の声が絶えないだろうと捨てられそうなところを勇里たちの支部が引き取ったのだ。しかし、扱う人間もなかなかいなかったため、錆びてボロボロになっていたところを穂波に救われた。

穂波はバイクの免許を取ろうとしたが、年齢が足りなかった。しかし、風紀委員の仕事のみに使い、事件を早く解決に導くための手段として活用させてもらうと掲げた結果、お偉方はしぶしぶ許可をした。なぜ、これぐらいで許可をしたのかと言うと、穂波の能力である行動制限で急ブレーキをかけられるからだ。運動量さえも止め

てしまうので、バイクの車輪は回転しながらも前に進まないということが実践で証明されている。

次にバイクの詳細だ。水素爆発を利用したのは書いた通りだが、爆発で起こる力を使っているのではなく、爆発そのものを使っている。強度に関しては心配がいらなと言われたが、爆発しているせいでかなりうるさい。後部には上向きと下向きに爆発の余波を排出する器官があるのだが、意外にそれだけでバランスはギリギリ保たれている。

「風よ！ あたしは風になるのー！！」

後部座席で叫んでいるのは、なぜか立ちながら風を満喫している勇里だ。ただでさえギリギリなのに、立っているせいでバランスが崩れる。

右往左往するハンドルを能力で止めては戻しを繰り返しながら、なんとか現場に到着した。

「あー、涼しかった」

「私は冷や汗で涼しいです……」

虚ろな目をしている穂波を置いて、勇里は野次馬の群れに向かって走り出した。

「ジャツジメントです！ 道を空けてください！」

勇里が野次馬に去るよう促すが、聞き入れる者はいなかった。

（なら、能力を使わせてもらっわよ）

勇里は精神奪取を使い、野次馬の背中に触れていきながら「この事件を見たい」というやる気無くさせる。触れられた人間は興味が失せたかのように散り散りになっていった。

ドンドンと中心に向かっていき、ようやく事件の現場にたどり着いた。体格の良い男が三人で、一人の女の子をよってたかって殴っていた。あまりに痛々しい状況に声が詰まるが、勇里は勇気を振り絞って走る。

そして、勇里と同時に走り出した人影があった。

勇里よりはいくつか高い背の少年で、髪はウ二のようにツンツン

していた。シャツのボタンは上二つが外れているというラフな格好だ。その少年は一直線に不良たちに向かっていく。

（ああもう！ めんどくさいわね！）

勇里は少年に追いつくと、少年の腕を掴んだ。これで「事件に関わろうとする」やる気は消えたはずだ。

しかし、少年はまだ腕を振りほどこうとしていた。

なぜ、という言葉も出さないうちに腕を振りほどかれた。少年は女の子の前に躍り出て、庇うように両手を広げる。

「デメエら！ よってたかってたった一人の女の子をいじめて楽しいのかよ！！」

カッコ良く登場したはずなのだが、すぐに少年は不良の一人に殴り飛ばされた。足を踏ん張り、持ちこたえた少年はすかさず不良を殴り返す。

「あのままじゃ危ないわ！ 穂波、不良に行動制限！！」

「はいっ！！」

直後、最初に少年を殴った不良の動きが止まる。しかし少年が殴った途端に動きだした。

「ど、どうしてよ！？」

勇里は驚きの声をあげながらも不良たちに触れて、「動こうとする」やる気を無くさせた。有無も言わぬうちに不良たちは地に倒れ伏せる。

少年は驚いた顔をして、勇里を見つめた。

「助かったよ、ありがとう」

「あなたねえ、助かったよじゃないわよ！ いきなり突っ込んでったりして！」

「ご、ごめん！ ごめんな！」

さっきの威勢はさっぱり消えて、へっぴり腰のような声を出しながら少年は逃げるように去っていった。

能力の効かない少年（後書き）

このツンツンは誰でしょうね〜

感想などお待ちしておます！

風紀委員としての志（前書き）

久しく書いてませんでした……

風紀委員としての志

水素を応用した超轟音近所迷惑バイクを乗り回し支部に向かった。真っ先に峰合支部長に顔を寄せて、唐突に質問をする。

「能力を打ち消す能力者あ？」

怪訝な表情で見つめた峰合。それもそうだろう。そんな能力者がいれば能力がどういう風に出来ているとか、消している力の働きは何かとか、そういう実験をたらい回しにされて、とても人前に出れるような生活は送っていないはずだ。少なくとも、無能力者の中にわざわざ飛び込んで殴り合いなんかするわけがない。

峰合は勇里の見た人物像から、自前パソコンで学園の特定を開始する。キーボードのキーをはじく音がしばし続いた。

特になにかするわけでもないのに、勇里は穂波に今回のことについて意見を求める。

「能力を打ち消せるような能力者が、どうして無能力者の集団に飛び込んだと思う？」

「そうですねえ」

指で顎を撫でて思案顔になる穂波。

「正義感と言えば片付けられるんじゃないですか？」

「うん？」

これはまた高尚な単語が、とは口に漏らさず心で毒づく。正義感なんて掲げて殴られに行つたんだ。勝ち目のない戦いに首を突っ込むのは、わざわざ友達の喧嘩を止めに行つていつの間にか自分も喧嘩に参加してた並みにくだらない。

などと第三者の意見みたく批判的な言葉を並べてみるが、

「その正義感、あたし達も見習うべきかな」

なんて思想と食い違わせてみる。風紀委員の仕事も少なからず勝ち目の無い物も含まれている。それに好きで首を突っ込むのが風紀委員であり、首を突っ込むのが仕事なのだ。その正義感を根から引

き抜けるほど偉くなつたつもりもないし、むしろ参考にすべき志である。^{「じつや」}

「そうですね。あれほどの悲劇を目の前にしても、なお他人を助けようとする精神。風紀委員は忘れるべからず、と思いしられます」
にこやかに笑顔を浮かべる穂波に勇里も釣られて笑う。確かに、これは遊びじゃない。勇里も正義感という志を持って風紀委員になつたことを思い出した。

それはたしか、いじめの現場に遭遇した時だつたと思う。

たつた一人の無能力者の幼い女の子を、周りの子供たちが能力を使って半ば拷問にも似た仕打ちをしていた。体中は焼け跡から擦り傷だらけ。毎日のように、その子が泣いていたのを覚えている。

ある日のこと、勇里はいじめの現場に遭遇して、いじめっ子たちに言つた

「どうしていじめの？」

とてもシンプルな質問だつた。しかし、相手の質問もまたシンプルなものだつた。

「こいつがレベル0だからだよ」

そう、その女の子はレベル0。つまり無能力者だつた。かろうじて熱を発せられる発火能力を持つ程度で、能力としては評価に値しないものだつただろう。

対して、その時の勇里の能力はレベル2。やる気を完全に無くさせるぐらいには出来た。そして、その無能力者の子が抱える重石が理解できなかった。

「レベル0だからいじめの？」

勇里はいじめっ子たちに問いを投げかけた。いじめっ子たちはしはしのしどろもどろの末、気の強そうな男の子が怒り気味に言つた。
「そつだよ」

いかにも正論であるかのように。自分たちは間違っていないとい

う自信があるかのように言った。

幼かった勇里には、それも理解できない。

なぜ能力が使えないのが悪いことなのか。学園都市の外にいる人間は能力が使えないことぐらいの知識があった勇里には疑問が溢れる。

「外の人たちは能力使えないよ？」

「外だからだろ。ここは能力を使える奴らの場所」

そういえばそうだった、と納得する。でもまだ、それはいじめて良い理屈になっていない。

「でも、能力使えないだけだよ？」

「使えない奴は頭悪いじゃん」

「どうして？」

「授業で習っただろ。自分だけの現実を持つのが能力者だって。自分だけの世界ってことだろ？ 自分の能力が現実にあると仮定して、そこから演算を利用すれば能力の形は整うんだ。発火能力なんて簡単なもん使えないコイツはバカなんだよ」

子供が難しい言葉使うなあ、と子供ながらに勇里は感心した。

さて、本題に移ろうか。

「じゃあ、バカならいじめていいの？」

虚を突かれたように、いじめっ子たちは顔を固くした。もともと答える分の回答は控えていたんだろうが、それを外したらしく持ち合わせの回答が無いらしい。

勇里が小首を傾げていると、自分だけの現実を説明してくれた男の子が前に出てきた。

「なんなんだよ！ お前もいじめるぞ！」

と、殴りかかってきた。子供の考えることは単純だ。言葉で通じないなら殴ってでも言うことを聞かせると。

勇里はその攻撃を横にジャンプして避ける。そして、男の子の肩に触れて

「怒らないでよ」

怒るやる気を無くさせた。

男の子は冷めたような顔になり、勇里たちから離れて机に突っ伏した。怒る要素がある記憶があるのに怒れない。気持ちがおかしくなりそうなのだろう。落ち着かせなければ涙が出そうになるはずだ。他のいじめっ子たちにも触れていき、いじめをするやる気を無くさせていった。

勇里はクラス唯一のレベル2ということもあり、いじめっ子たちは抵抗もせずにやる気を削がれた。

勇里から離れていくいじめっ子たちを呆然と眺めていた無能力者の女の子が勇里に頭を下げた。

「あ、ありがと……」

目を下に逸らして、俯いたままお礼の言葉を述べる。下がった女の子の頭を、勇里は優しく撫でてあげた。

「いい子いい子」

耳まで顔が赤くなった女の子も知らず、勇里は撫で続けた。

これが風紀委員を志すきっかけだった。

弱い者を守ることに誇りを感じたし、なによりも傷つけずに人を救える勇里の能力は風紀委員の仕事上扱いやすいものだった。重宝している。

などと思い出に向かってしんみりしていると、峰合がため息をついた。

「……見つけたわよ」

パソコンの画面に指を差していた。覗きこむと、髪の毛がツンツンな高校生が映っている。

「そうそう！ この人！」

勇里は喜気として声をあげた。

詳細は、無能力者で成績も低い。とても正義感を持っているような人間とは思えない詳細だった。

「ほら見なさい。能力を持ってないでしょ」

「はい」

穂波がささず返答する。続けざまに口を開く。

「しかし、能力名の欄が空白です」

能力名だけが空白になっている。他の無能力者でも、名前程度は持っているものだ。本当に何も持たない能力者というのは珍しいと言われている。

「もしかして、能力を打ち消しちゃうから無能力者なんじゃ……」

「ありえるけど、別にあなたが知るところでも無いでしょ」

そう言つと峰合はパソコンを閉じた。膨れっ面をする勇里をよそに、峰合は穂波に話しかける。

「すまないけど、もう一件仕事行ってくれる？ 能力者が暴れてるらしいのよ」

「はあ。で、詳細は？」

「なにやら、廃墟でドタバタしているらしい。無能力者集団スキルアウトの住処を狙つての犯行らしいけど」

そこでようやく勇里は完全に無視されていることに気づいた。

「勝手に話進めないでください！」

「穂波が記憶してくれる。お前いらん」

ガン、という効果音が付きそうなほど肩を落とし、両手を床につける。だが誰も何も言ってくれないので、俯きながら立ち上がった。

「行動奪取の二人なら楽勝よ。行つてらっしゃい」

あまりに粗雑な扱いに一言文句つけようとしたが、穂波に引きずられるように現場へ連れて行かれた。

風紀委員としての志（後書き）

次からバトルかな？

VS 摩擦無視「パワーシャット」(前書き)

バトルをしますよ

まあしかし、時を止めて捕まえれば終了なんですけどね……

V S 摩擦無視「パワーシャツ」

「うつせーぞそのバい……!!」

なにやらチンピラが大声で叫んでいたが、バイクから鳴り響く轟音とあまりのスピードのせいで何を言ったか全く聞き取れなかった。人気の少ない車道を速度表記の看板を無視して突き進む。警備員に捕まりそうなものだが、風紀委員ということで『ギリギリ』許されているのだ。これで事故をしようものなら風紀委員を辞めさせられる。だからこそ穂波の行動制限だ。

風向きでポニーテールがあらぶっている勇里は片手で髪を抑えながら、穂波に話しかける。

「人使い荒いよね、あの人」

あの人とは、峰合雀のことだ。サポートも出来ているし、風紀委員にとっては大事な存在だが部下を扱うことに関しては無頓着すぎるところがある。

対して穂波は髪を爽やかになびかせながら答えた。

「信頼されてるんですよ。まだ働けるだろう。私達なら大丈夫だろうって」

「はあ。でも、さすがに休みくらい」

言い終わる前に、バイクは停止した。辺りを見れば、霧が張っているかのように煙が舞っており、たびたびに崩れるような大きな音がする。

バイクから降りてヘルメットを脱ぐ。ふう、とため息をついてヘルメットをバイクに置いた。

穂波もヘルメットを脱いでおり、服装を整えている最中だった。

「えっと、とりあえずあの恐ろしい音の近くに行けばいいんだよね」

「そうですね。さっさと終わらせましょうか」

穂波がそそくさと歩き出した。勇里もつられて歩き出す。

もしかしたら、穂波も疲れてて、すぐに帰りたいと思ってるのか

な。

……。

音のする方向へ行けば、粉塵の中に一つの人影が見えた。それは滑るように地を走り、ビルにぶつかるど一氣にビルの壁が割れ始める。バランスを失ったビルはそのまま倒れるように崩れた。

勇里と穂波はその様子を黙って見ていた。凄惨な光景とはこの事を言うのだらう。スキルアウトらしき人たちがビルから慌てて逃げ出していく。人影はそれを追い討ちするわけでもなく、ただビルを破壊していた。

「止まりなさい!!」

勇里は人影の前に出た。滑るようにして走っていた人影が急停止する。スケートしている動画を途中でストップさせたら、多分こういう急停止の仕方をするんじゃないか、というほどの不自然さだった。

人影が粉塵から姿を現す。背格好は男で高校生ぐらい。右の頬に赤くペイントがされており、服も真っ赤なドクロがプリントされていた。にやけた表情で勇里たちを交互に見ていた。

勇里は右腕の腕章に視線が行くように腕章を広げて、大きく息を吸い込んだ。

「こちらジャッジメント!! 大人しく捕まれっ!!」

絶叫ぎみに叫んだ言葉に男は吹き出した。勇里はいたたまれなくなり、更に叫ぶ。

「逃げようとしたって無駄だから!!」

「へいへい」

男が口を開いた。

「風紀委員、って言ったっけ? 俺たちにそんな表の常識は関係な

い。そうそう、生きている世界が違う」

「生きている世界が違っても、犯罪者は犯罪者です」

穂波が気強く押した。

男もその返しは予想外だったのか、目を丸くする。だが、すぐに細めて、口を引き裂いたように広げる。

「おいおい、本気でやるつもりかよ」

「本気もなにも、仕事ですから」

直後、男の動きが止まった。

穂波が行動制限を使ったのだ。勇里が歩きながら男に近づき、後ろに回る。

「あとはよろしくです」

「オーケー」

男の背後で手を背中にかざしていると、能力が途切れて男が動きだした。

すかさず勇里が男に触れる。

「へっ？」

だが、勇里の手は男の体に触れた感触の前に横に逸れた。何事かと顔を上げると、男が勇里を見下ろしていた。

「へいへい、俺の能力は摩擦無視。^{パワーシャット}覚えとけ」

勇里は足を捻り、転がるように飛んだ。次に勇里の足があった場所が摩擦無視によって踏み潰され、めり込んだ。

人間味の無い光景に表情が固まる。摩擦無視はそれを見て大笑いした。

「おーいおい、漢字で書くと摩擦無視。つまり、俺に摩擦は関係ない」

「摩擦と、その足がめり込んだことと何の関係があるんです？」

穂波が構えの態勢を取りながら、後ずさる。能力を使って黙らせればいいだろうが、穂波の能力は研究者にすら解析できない演算方

式だ。かなり複雑なせいで、大きな音と心の乱れが起きている状態では使うことが出来ない。

「うんうん、その意見は当然だな。俺の能力は摩擦を無視すること。つまり、ぶつかってこされるような状況を生み出さない。物質が形を整っているのも摩擦のおかげで簡単には崩れないからだ。へいへい、よくやるだろお前らガキどもは。ノートとノートの紙を一枚ずつ重ねていって、なかなか取れにくくする。俺はああいう風に固まっっている物を無視する」

長々と語った摩擦無視は、「まあまあ」と言った後に間を開けて言った。

「俺の攻撃は盾で防御不可能だ」

摩擦無視は地面を蹴り飛ばし、もう片方の足で滑りながらビルに近づく。

なにをするつもりなのよ。勇里はその光景を見つめていると、摩擦無視は手をビルに難なくめり込ませて、大きくなぎ払い寸断した。まるで何かにかじられたような大きな穴が出来、そこからヒビが広がっていく。一度、大きな音がしたあと、勇里に向かってビルが倒れてきた。

とつさに動けない。足がすくんで立ち上がれない。ちょっと、どうして動かないのよ!?

「勇里ちゃん!!」

穂波がビルの動きを止めた。

「おいおい、俺を忘れてんじゃねえ!!」

ゴツゴツした地面を不自然に滑りながら摩擦無視は高速で穂波に接近する。穂波は手近にあった石を摩擦無視に投げつけた。しかし、石は摩擦無視の腹をラインをなぞるように飛んだあと、少しバウンドして停止した。

「その様子じゃあ、二つ同時には止められねえみたいだなあ!!」

摩擦無視が手を振りかざす。あのままじゃ真っ二つだ。真後ろに飛んだ穂波はスカートの裾が切れるのに舌打ちすると、もう一度構

えた。

勇里はようやく動き出し、ビルから離れる。他のビルの影まで走りきった直後、ビルが行動を開始し、そのまま落ちて崩れた。

摩擦無視もその様子を見て舌打ちする。これで行動制限も使えるようになった。状況は好転した。

「捕まる気に、なりました？」

「おいおい、バカ言うんじゃない。俺が捕まる？　いいや、デメエらが倒されるんだ」

「んじゃあ、あなたの対処法も分かったし、とつとと終わらせましようか」

摩擦無視が一瞬、怪訝な表情をした。すると、その表情のまま固まり、腕や足が頭に吊られるような形で力なくうなだれた。

「つまり、演算をしている頭の信号を止めればいいんですよ」

どんな能力者にも言えることだろう。演算を止めさせられた体は能力の効果を失う。

急いで走ってきた勇里は、その様子を見て首を傾げた。穂波が視線で合図をしてきたのを確認すると、勇里は手に触れた。

「はい、おっしまい」

行動制限が解かれた。

「動くやる気を無くさせる！！」

摩擦無視は眉を動かす間もなく倒れる。

しばしの沈黙のあと、二人同時に吹き出す。

「はあ、ビックリしたよ」

勇里がため息混じりに言った。

そう。こういう危ない場合があるのが風紀委員という仕事なのだ。それに立ち向かっていく勇氣。志を持たなければならぬ。

「さ、帰ろうか。いい経験になったし」

「そうですね。油断大敵ですよ。勇里ちゃんはいつも突っ走っていいんだから」

雑談を交えながら、勇里と穂波がバイクを取りに歩き出す。

「へいへい」

後ろから声が聞こえたと同時に、勇里と穂波は左右に飛んだ。直後の何かが振り下ろされ、地面を砕いてめり込む。

勇里は顔が固まった。多分、穂波も同じ顔だろう。どうして

「どうして？　へいへい、そりゃあコイツのおかげだよ」

摩擦無視が立っていた。やる気、いや動こうとする思考ごと無くさせられたはずなのに、どうして立つことが出来る？

「運動と演算を補正する機械だよ」

後頭部を人差し指で小突いている。よく見れば、黒い小さな箱が取り付けられており、そこから頭にチューブ状の物が伸びている。

「でもどうして動けるのよ！！」

叫んだ。補正するだけの機械がどうした。そもそも動こうとするやる気を無くさせたはずなのに。

摩擦無視は鼻で笑ってみせると、肩をすくめた。

「いやいや、動こうとしていない。ただ、頭の中で自分がどう動くかシミュレーションしただけだ。それをこの機械が補正して動かしてくれる。無駄骨どうもご苦労様でした」

V S 摩擦無視「パワーシャット」（後書き）

分かりづらかったですかね。

摩擦無視は自分の皮膚に摩擦を無効化する膜を貼る能力です。

その膜の横幅を大きくすれば絶対防御の盾になり、薄くすれば防御不可能な攻撃にもなります。

一応、膜のおかげで体には届いてなかったもので、勇里の攻撃はノーカウントでした。

摩擦無視の一人称が俺と僕で混同してたので修正しますた

重力掌理「グラビティスタンド」(前書き)

摩擦無視との決着(?)です

今更ですが、摩擦無視ってネーミングは自分から言うのもなんですけどセンス悪いですね……

正直、摩擦は無視してない、つか攻撃を受け流してるから物理返しつつても良かったんじゃないやゲフンゲフン
重力掌理。 いったい何のことでしょう

重力掌理「グラビティスタンド」

「面白いわ。本気でやるつもりなのかしら？ さっきと同じ末路を辿ることになるわよ？」

「いやいや、そもそもお前らの勝因はたった一つ的能力だけだ」

摩擦無視は地面を蹴飛ばし、穂波に向かって滑る。穂波は身構えたが、摩擦無視は中途半端な距離で停止した。

そのまま地面に足をめり込ませて

「そこオッ！！」

コンクリートの地面にヒビを走らせ、浮かばせたコンクリートの破片を穂波めがけて蹴り飛ばした。

穂波はその破片を行動制限で止める。そして右方向に走り、行動制限を解いて回避

しようとした直後

摩擦無視が穂波に拳を放つ。

ガードは、無理だとさੱつたのか、そのまま右に走る。

勇里もまた、それを止めに走る。摩擦無視に触れれば勝てるのだ。だが届かない。間に合わない。

摩擦無視の手が当たる直前で穂波は後ろに跳ねた。

しかし、着地するまでに穂波の体が不自然に浮いた。まるで、何かに操られているように。

「なっ……」

浮いた体が前に押し出され、摩擦無視の拳が当たる位置に持つていかれる。そして、摩擦無視の拳は穂波の腹を捉え、穂波を殴り飛ばした。一秒ほど宙を飛んだあと、背中からコンクリートに打ちつけられ受け身も出来ずに転がっていった。

呻いたまま、立ち上がらない。腹を抑えて丸まっている。それもそうだ。今のは能力が使われてなかっただけマシだが、その威力は高校生ぐらいの男子の一撃。中学二年生の女の子じゃあマトモに受

ければ立つのも難しいだろう。

「さてさて、お片付けはそろそろ終わりさ」

「い、今のなんなのよ……」

勇里が目を見開いたまま言う。それを見て苦笑しながらも摩擦無視は答えた。

「へいへい、なにつてことは無いだろ。わざわざテメエらを能力で引き裂く必要は無いっつー話だ」

「そうじゃなくて……」

そこで勇里の言葉が詰まった。摩擦無視が先ほどのようにコンクリートに足をめり込ませて、コンクリートの破片を蹴り飛ばす。

先ほどと同じ手、か。勇里は避けるという考えを改め、腕で破片をはじくことにした。腕で破片をなぎ払う。切り傷が出来たが、ここは我慢して摩擦無視に対抗する。

腕で見えなかった視界が開けると摩擦無視は目の前に来ていた。

その右の腕はすでに殴る準備を終えていた。

「ここでおしまいだ。風紀委員……!」

爪が甘いよ。

勇里は左足を地面に滑らせるように伸ばす。上半身が徐々に下がり、摩擦無視の拳が空を切った。

「んだと!?!」

左足が摩擦無視の足をはじく。前面に倒れ始める。勇里はそれを見逃さず、右手を摩擦無視の顎に向けて、アッパーを決める態勢にする。

「おわりだあああああああああああ!」

その拳は能力に阻まれることなく、摩擦無視の顎を正確に貫いた。一瞬の間の後、摩擦無視から鈍い音がし、宙に飛んだ。

「かはっ……」

アッパーカッターを決めると同時に能力を使った。

それは

「思考するやる気を無くさせる」

全てを断ち切られた摩擦無視は目を閉じたまま、ピクリともせず倒れていた。

勇里は穂波に駆け寄り、腹をさすってあげる。痛みもひいてきたのか、表情は固くなっていなかった。やや引きつつてはいるが、笑顔を浮かべている。

「へへへ、ありがと勇里ちゃん」

「らしくないなあ。あたしが言うセリフでしょ？」

冗談を言ってみせたつもりだったが、穂波の表情が笑顔から泣き顔に変わり、胸に顔をうずめてきた。勇里は少し驚いて両手が空を泳いでいたが、穂波の頭を撫でるために両手を頭に置く。

「今までこんなにヤバいことなかったもんね。そりゃ、怖かったよね」

だが、返ってきた言葉は泣き声でも同意の言葉でもなかった。

「勇里ちゃんのおっぱ」

穂波の脳天に頭突きがヒットした。

……。

摩擦無視を警備員に引き渡し、穂波の超迷惑轟音バイクに乗って支部へと帰った。

どうやら、摩擦無視は少年院に入れられるらしい。どんなに硬く頑丈な物さえも引き裂く能力者に、そんな程度の処置で大丈夫なのか気になったが穂波の「気にしなくても大丈夫ですよ」という言葉を信じた。

ようやく学生寮に戻ってこれた勇里たちの目の前を、二人の女の

子が走り抜けていった。

「おねええええさつまああああああああ！！！」

「ぎゃあああああ！！ 寄るな！！」

どうやら御坂美琴と白井黒子らしい。御坂の放った電撃が白井の体をしびれさせたが、すぐに復帰して笑顔を浮かべて抱きついていく。何か執念にとり憑かれているような恐ろしさがあった。

そんな騒動を目の当たりにして、まるで横断歩道を渡る際に車が通り過ぎるのも待つかのような気持ちで立っていると、御坂がこちらに気づいて近寄ってきた。

「ん？ もしかして、朝の」

「あ、どうも」

軽く会釈をする。御坂も慌てて勇里を真似した。

「あら、お姉様。この方々とお知り合いのですの？」

後ろから白井黒子が髪の毛をパーマのようにしながら歩いてきた。もちろん、笑いが吹き出しそうである。だが、我慢だ。

御坂も振り返って「あ、朝の、プッ……」と笑いをこらえていた。御坂さん、絶対に笑わないでね。

横を見れば穂波も口の橋が釣り上っていた。同じく笑いをこらえているらしいが、まだ笑顔に見えるレベル。

しかし、御坂と勇里の顔は明らかに不自然だった。

「どうなさいました？」

白井が顔を覗き込んでくる。ヤバい笑いが……。

御坂は自分の手を自分でつねってこらえていた。もう不自然さしか残っていない。

話題を変えようとしているのか、御坂が勇里たちを震えた指で差す。

「え、っとね。プクク、この、この子と朝にぶつかっちゃって」

「そうなんですの。すみません、お姉様があなたにご迷惑を……」

慕っている人間が失態をしたのなら自分も謝るのが礼儀、その精神は賞賛する。いくらでも拍手をしよう。

ただ、深々と頭を下げてパーマになった髪をこちらに向け
ないでよ。

「うん、そんな気にしてないから」

吹きそうになる口を抑えて、穂波を引っ張って、半ば逃げる
ように自分の部屋へ走っていく。

後ろから寮監の大笑いする声が聞こえて、ついに吹き出して
しまった。

……。

「摩擦無視、脱走したらいいですよ」

その話を聞いたのは、昼食に栄養のバランスを取るための野菜
を多めに混ぜたハンバーガーを頬張っている時だった。口からキャベ
ツの端を出したままにして勇里の顔が固まった。

摩擦無視の能力でその辺のだいたいの不安要素は掴めていた。し
かし、演算補助をしなければならぬような能力者が、どうやって
脱走なんか出来たのか。もちろんのことだが、生活に支障をきたさ
ないレベルの補助機械サポートメントアーマーじゃあ取り上げられるはずだ。

頬張っていたハンバーガーをコーヒで喉に流し込む。

「どうやって脱走できたのよ」

「やつぱりそこを聴きますよね。運動と演算補助の機械って言うて
ましたよね？ 彼、あれが無ければ月並みな人間の腕力すらも出せ
ないらしいんです」

「じゃあ、いじくって演算補助だけ外せば？」

「それが、体の信号とリンクしているらしくて。ほら、言っただ
でしょ？ シミュレーションどつりに体を動かすって」

確かにそんなことを言っていた。頭に直接関わるのなら、外すわ
けにはいかないだろう。

「つまり、そのおかげで脱走できた、と」

「そうなりますね。彼の病気は、筋肉に送る運動信号が極端に伝わりにくくなり、握力や腕力だけじゃなく、歩くことにも関わるので了解されたらしいんです」

「ふーん。で、誰から聞いたの？」

「峰合先輩です。残業込みで頑張ってくれたんですよ？ 病院にもコネがあるらしいので、その先生から摩擦無視がなぜ運動と演算補助の機械を着けているのか説明を小耳に挟んだらしいです」

「できた世の中ねえ。そんなに情報が入っていいものなのかしら」
「能力者の情報は重要機密ですからね。風紀委員の調査という名目でも、なかなか教えてくれなかったって言ってました」

ここまで割り出せたなら、正直スゴいを通り越して尊敬できる。しかし、こんなに話が進んでいいものか。

勇里が頭を悩ませていると、穂波が肩を叩いてきた。

「まあ、今は考えるのを止めましょう。摩擦無視に関する仕事が入ってから考えればいいんです」

穂波が勇里の隣に座り、持っていたハンバーガーを両手で持ちながらかじりついた。片手でがさつに食いついていた勇里と違うことが、やけに恥ずかしく感じた。

……。

案の定、摩擦無視に関係する仕事が入った。

内容は、摩擦無視の場所を掴むこと。警備員だけでは手が回らず、風紀委員に仕事が回ってきたのだ。

「あたし達が探せ、と？」

「そう」

峰合雀はデスクトップのパソコンを開き、並べられた仕事ファイ

ルを整理しながら答えた。せめてコツチ向けよ。

肩を落として溜め息混じりに呟く。

「どこに行きやあいいのよ……」

「大丈夫よ。目星はついてるらしいし」

「はあ!？」

勇里が驚きの声をあげる。

「だからあ、目星はついてんのよ分かる？」

「分かります」

「近くに廃ビルがあるのよ。最近になってテナントも無くなった場所だから取り壊し予定のね。生活できる道具はいくつかあるから、多分立てこもってるんじゃない？」

「はあ。で、どうやって脱走したんですか？」

「エスパーか、重力の能力で監視がやられたの。まあ、あの安定しない浮かび方からして重力が妥当だけどね」

「つまり？」

「監視が壁に叩きつけられて気絶したのを推測すると、ただの重力操作の能力じゃないわよ」

「その心は？」

「重力掌理っていう能力。重力を手のひらで操作して相手を掴んで持ち上げることも出来る能力よ」

「脱走犯が二人ってことですか？」

「いいえ、一人よ」

重力掌理「グラビティスタンド」（後書き）

重力掌理、根本的には重力操作と変わりません。
ただ操作方法が違うだけです。しかし、手のひらを使って重力を操作するだけにアクションの幅は広いです。

感想などお待ちしております

暗部組織『パーティ』（前書き）

遅れスマソ

暗部組織『パーティ』

「で、その廃ビルがここ？」

まだ真新しく感じる四階建てのビルを見上げながら言った。穂波は隣で頷く。

「さあ、こんな仕事はさっさと終わらせましょう」

……。

「こちら板野絹人^{いたの きぬひと}。『パーティ』、聞こえるか？」

摩擦無視ー板野絹人はテナントの無くなったビルに立てこもっていた。真夜中に脱走したうえに、風紀委員との戦闘で疲れていた絹人は眠りにについていた。気づけば真っ昼間になっていた。

『パーティ』とは、絹人が所属する学園都市の暗部組織だ。四人組で構成されている。

とりあえず誰かに繋げようと絹人は『パーティ』が乗車するゴミ収集車に偽造した車へ携帯で電話をかける。受話器を取った音がした。

「こちら板野絹人だ。任務は成功したが、ヘマをやらかしちまった」

「ああ！？ テメエ、どこほつつき歩いてやがったアー！！」

開口一番の怒声に携帯から耳を離れた。

^{オーダーチェンジ}

「元素分解か。めんどくせえのが出てきやがった」

「めんどくせエだと？ ぶち殺されてエのか？」

罵詈雑言を並べそうなほど頭にキテいるセリフだが、声はどちらかというとアニメのような可愛らしい声だった。そのギャップが逆に恐ろしく感じられる。

眉をしかめている絹人は、ややマシンガントークのように絹人を

罵っている元素分解の口を挟む。

「止めとけ。勝てもしねえ相手に喧嘩売っても虚しいだけだろ」

「勝てもしねえ、だとオ？ 触れられれば一瞬で地獄へ堕とすことの出来る元素分解に向かつて、勝てもしねえだとオ！？」

「そもそも、触れることが出来ないのに、なに言ってるんだよ」

「はン、知ってるだけ。テメエは演算補助に頼るあまり、体中に摩擦無視を張ることも出来ないってことぐれえなア！！」

勝ち誇ったような声が携帯から聞こえ、その後に鼻を鳴らす音がした。

「そうかよ。じゃ、切るぞ」

「ちょ、ちょちょちよつと待ちやがれ」

焦ったような声。

「あん？ まだ何か文句あるのか」

「ち、ちげエけどよ……。怪我とかはしてねエのか、とか……」

急にしおらしくなった元素分解を怪訝に思う絹人だったが、元素分解はまだしおらしくゴニョゴニョと何か言っていた。

「どうした」

「ナン、でもねえよ！！ またな！！」

一方的に切られた。携帯を持ちながら首を傾げる。

「はあ。意味分かんねえな。にしても」

徐々にビルの外から爆音が響いてきた。

そこから甲高い声がつんざく。

『こちら風紀委員！ 大人しく捕まりなさい！！』

絹人は軽く両足でジャンプする。絹人の着地した床が絹人を飲み込んでいく。床が崩れているのだ。何回か床を貫きながら絹人は落下していく。一階の床が見え、能力の作用を変換し『鋭く』から『平常』に戻す。あれほどの高さから落ちていてもなお、平気な顔をしていた。

目の前にいるポニーテールの女の子が目を丸くしている。

「お片付けタイム」

……。

勇里が足を踏み入れた直後、天井が砕けて人影が不自然な着地をした。その人影は、引き裂いた笑みから白い歯がガラガラと輝き、威圧感を放つ。

「お片付けタイム」

まるでバネを使ったかのような跳躍をした人影―摩擦無視は手を刃のように尖らせ、勇里に向かって伸ばす。

勇里は一步後ろにのけぞり、ギリギリで攻撃をかわした。しかし、その拍子に倒れてしまう。

「さっさと消えろ!!」

摩擦無視の腕が勇里を突き刺そうとする。体をひねって転がし、どうにか避ける。外した攻撃は頑丈なコンクリートの床をもものもせず、手首まで埋まっていた。

「これだけやって、ただで済むと思ってんの!？」

風紀委員の育成時に鍛えられた身体能力を活用し、小さくジャンプを繰り返しながら摩擦無視から距離をとる。

しかし、摩擦無視もまだ攻撃を続ける。体を45度以下にまで傾かせて走る。明らかに有り得ない態勢だった。

（重力掌理のおかげ？ にしては、ちょっとおかしい）

とても能力を使っているようには見えなかったからだ。必死に攻撃を当てようとしている様は、そう思わせるに足りる物だった。

「くそっ、逃げてんじゃねえよ!!」

業を煮やした摩擦無視は手近の石ころを蹴飛ばした。肩に当たっ

た勇里はジャンプをした直後なせいでバランスを崩した。足をひねってしまい、尻餅をついたまま立ち上がれない。

「ここで終了だ、風紀委員」

摩擦無視の手のひらが勇里の眼前を覆い尽くす。

前に

一つの暴走バイクがビルに突っ込んできた。

摩擦無視はすぐさまそこから飛び退く。さっきまでいた場所をバイクが駆け抜けていった。

「ははは、不意打ち失敗ですね」

特に気にも止めてない調子でバイクに乗っていた穂波は笑った。

「不意打ち、だと？」

「今まで、追い詰められていたように見えていたのは全て芝居つてことよ」

勇里がスカートの汚れを叩き落としながら言った。

「こっから先は強硬作戦よ」

暗部組織『パーティ』（後書き）

短くてすみません

眠すぎて、手が震えてギブアップです

パーティ、という単語でも出そうと思って出しました

衝撃吸収「ダメージカウンター」(前書き)

暗部がどうのこうの言っ
てたくせに暗部出してるのはなぜかって？
厨2病だから仕方ない

衝撃吸収「ダメージカウンター」

「へいへい、くだらねえタクティクスバターン戦術方法だ!!」

摩擦無視は横にあった柱を蹴って叩き壊す。砕けた破片が勇里たちに向かって弾き飛ばされた。

勇里は柱に隠れることで回避する。穂波もまた、バイクに隠れて攻撃を避けた。

「おいおい、無駄だって、分かんねえのかよ!!」

勇里の隠れた柱から腕が生えてきた、のではなく腕が柱を貫いていた。その腕は横なぎに動かされると、柱を糸もたやすく寸断した。

「へいへい!俺の攻撃に、盾の意味は皆無ッ!!」

次に高く上げられた蹴りが柱を吹き飛ばした。身を投げ出して回避するのに戸惑いはなかった。あんなのをマトモに食らったら頭を砕かれてしまう。

倒れながらも摩擦無視から視線を離さない。腕が淡く輝いていた。それは注視しなければ見えないほど些細な物で、次の摩擦無視の行動で見えなくなる。

摩擦無視は倒れた勇里を無視して、バイクからすでに体を出していた穂波に向かって走り出す。

「穂波!!」

「分かってます!!」

穂波はすかさず演算に入る。空間と場所を特定して、その時間が止まるようにする。

「へいへい、同じ手はもう喰らわんぜ!!」

視界から摩擦無視が消えた。視点を下げると、摩擦無視がスライディングの態勢で滑っている。先ほどまで摩擦無視が走っていた場所の、風やホコリが全て止まった。

呆然と眺めている勇里の耳に、穂波の悲鳴より先に聞こえた物があった。

コンクリートが崩れる音。

「ま、さか……！！」

勇里が隠れ、そして摩擦無視が破壊した柱が天井から破壊されていき、一つの石と化した柱が勇里の頭上を覆おうとしていた。逃げられない位置にあり、腕で受け止められないレベルだった。ぼんやりとしていた責任だった。こんな時に動けないなんて。さつさと気づくべきだった。

そもそも、とつさのことに足が動かない。あまりにも予想外だった。ここが狙われていることに気づかなかったことも後悔する。

摩擦無視は立ち上がって走り出し、その腕が穂波に向かって伸ばされる。

先ほど摩擦無視に破壊された柱の巨大なコンクリートの塊が勇里を潰そうと落ちてくる。

「勇里ちゃん！！」

穂波の叫び声と共に、まるでリングをフォークで刺したような小気味の良い音がした。しかし、その小気味良さが勇里の背筋を凍らせた。

勇里を潰そうとしたコンクリートの塊は落ちてこない。穂波が行動制限で止めたおかげだろう。

ならば穂波は？

「おい、おい……マジかよ……」

摩擦無視の腕が穂波の肩に深々と突き刺さっていた。

早く動こうとした勇里の足が絡まり、転ぶように膝をついた。ほんの数センチ後ろでコンクリートが地面に衝突して砕ける音がする。目を丸くしていたのは勇里だけではなく、摩擦無視も同じく意外そうな表情をしている。

一拍置いて、穂波の絶叫がこだまする。ビルに反響して耳なりを起こしそうなほどの叫び。耐性の無い人間には吐き気すら覚えそう

なほどの痛みに苦しむ声。

勇里も、怪我で爪が剥がれたという生徒がいて、その痛々しい声を聞いたことがあるが比喩物になどならない。

「穂波いいいいいいいつ!!」

勇里は呼応するように叫んだ。そして、そのまま走り出す。

ただ、右腕を突き出して。

「ち、くしゅう!」

穂波の肩から強引に腕を引き抜き、大量の血を流出させながら摩擦無視は勇里に向き直った。

勇里の目は瞳孔が開いており、形相もまるで違うものになっていた。

「息をする思考を切断する！！」

この能力で一番最悪の力を使い、ただ目の前の糞野郎をもがき苦しめるように殺す。

圧倒的なまでの殺気に摩擦無視は気圧された。

「やばっ……」

[illegible]

勇里は摩擦無視の顔めがけて拳を放つ。

あとちよつと。あとちよつとでこの糞野郎を殺せる……

だが、

謎の衝撃が勇里の脇腹に直撃した。

まるで壊れた人形のように勇里はコンクリートの床を跳ねながら転がる。

「テメエは、三橋……！」

驚いたようなマヌケな声を発した摩擦無視に、低い男の声が返事をした。

「任務成功だが、とんだ失態だな」

もやがかかったように、勇里の視界は鮮明ではなかった。それでも捉えた世界には、全体的に体の大きな男が映っていた。

なんなのよ、今の……。

勇里が頭の中で緊張感の無い調子で言った。大男はそれを聞き取ったかのように勇里に向き直る。

ダメージカウンター
「衝撃吸収。お前には、ビル三階分のパワーを食らわせた。数日は痛みでもがき苦しむぞ」

ああ、そう……。

「簡単に言つとだな、コンクリートを頭に落とされるぐらいの痛みだ」

それじゃ、結局変わらないじゃない。

「安心しろ。救急車の手配はしてある」

その言葉に安堵した勇里は、そのまま視界が真っ暗になった。

「安らかに眠れ。招かれざる客よ」

衝撃吸収「ダメージカウンター」(後書き)

残酷な画写無しと思ったらコレ……、という方もいますと思いますが
そう頻繁には出ませんし、ほんのちょこつとですのでご勘弁願いた
い!!

それと、また怪しい奴が出ましたね。衝撃吸収。
彼の能力は次回で明らかにしようと思います!

暗躍するは血に染まる舞踏会（前書き）

勇里たちがダウンしたので、こっから暗部『パーティー』の話を書きます

原作に比べるとチートと呼べる奴はいないです

暗躍するは血に染まる舞踏会

穂波、全治一週間の怪我。肩の骨が完全に引き裂かれており、輸血などの作業が困難。幸い、無理やりに引き抜かれたというほどのことは無かった。

勇里、全治三日。内臓に傷あり。青く腫れ上がっており、動くことも出来ない状態。二日ほど食事が取れないというだけ、穂波よりつらい状態かもしれない。

「あの行動奪取をこんなにボロボロにするなんてな」
アウトバタイン

病院の中、季節外れの黒いパーカーを着た少年は呟くように言った。白く染められた病院の中では嫌でも目立つ服装なのだが、誰も気にしていないようだ。というよりも、見えていないように思える。少年はポケットから写真を取り出す。写っていたのは、右目に縫い目がある男だった。

「経過壊し。メルトメモリーまさかアイツか？」

……。

ゴミ廃棄場に停車しているゴミ回収車から怒鳴り声が響いた。

「バカかテメエ！？」

元素分解だ。白いワンピースを着た清楚な女の子という印象は誰でも持ちそうなほど美人な顔立ちだった。可愛らしい顔を無理やりに怒り顔にして、ふかふかのソファから立ち上がり、真ん中に設置されているテーブルに片足を乗せて怒鳴る。

相手の板野絹人は悪びれも無い感じに欠伸をした。

「おいおい、うっせーな。こちら、女の子に重傷負わせちゃって軽く鬱になってんだよ」

「ああ！？ 出来ねエことするからだろオが！！」

元素分解は更に怒鳴り散らす。

絹人の隣に座っている大男こと三橋はなだめるように両手を振った。

「落ち着け女也美玲^{めなり みれい}。絹人だつて、わざとじゃないんだ」

「へいへい、そういうことだ。ここは大人になつて俺を許そうぜ、女也ちゃん？」

最後に本名を呼んだのは挑発のつもりだった。しかし、

「な、め、女也ちゃんつて、テメエ……」

と顔を赤くしてしまった。俯いて、そのままふかふかのソファに座る。

絹人は首を傾げる。

「おいおい、反論も出来ないってかあ？ 水が無けりや、なあんにも出来ない女也ちゃん？」

更に苛立たせる言い方で女也を煽った。

対して女也は堪忍袋の緒が切れたのか、テーブルに置いてあったペットボトルを掴み、

「水ならココにあんだよツツツ！！」

投げつけた。

女也の能力、元素分解は、触れた物を元素に分解する能力だ。触れれば手を離して自由な時に分解することも出来る。水が武器なのは、未熟な元素分解のせいで無理やりに分解され、いきなり分解させられた水素が条件無視で爆発するからだ。

投げられたペットボトルが放物線を描きながら飛び、絹人の眼前に来る。

そして、

扉を音速で突き破って飛んでいった。

簡単に言うと、絹人にぶつかる直後、飛ぶ方向が九十度曲がって

いたのだ。

数秒後に爆音がエコー音のように響きながら伝わってきた。急ぐように車にエンジンがかかり、走り出す。

全員が扉とは真逆の方向を見た。

そこには、セーラー服のスカートを短くしすぎてパンツが見え隠れしすぎな短髪の女の子がいた。

女の子は人差し指を扉に向けて、低い天井を見上げたまま言った。

「うつさいよ。黙っててくれない？」

その人差し指は青く輝き、バチバチという電気のような音を出していた。

女也は女の子を睨みつけた。

「夜鞠^{やまり}くウウウウウン？ どオいうことかなア」

「うるさいっての。今はマジカルかなみんの再放送がやってるの」

夜鞠はなぜか天井に設置されたテレビを見ていたらしい。というよりも、小型で薄型なテレビを天井にガムテープで貼り付けただけらしい。

「超電磁砲を超えた操作系電磁砲だっけエ？ 通称、派生電磁^{ローレルガン}。イ

ナズマを操作出来る能力」

「そうだよ、うるさいなあ」

それは一時期はテレビに取り上げられる、とまで言われた能力、派生電磁。学園都市の科学力でも量産も扱いも難しい科学兵器、操作系電磁砲を扱える能力者だ。もともとの超電磁砲とは違い、球体を打ち出して空中に留め、それを起点にして音速のスピードで電磁砲の放物線を曲げるといふもの。

「球体なんて作るより、ビリヤードみたいに玉を玉で弾いた方が効率が良いかつたっていう、ね」

打ち出した玉にも威力はある。超電磁砲の足元程度にはある威力で、体中のいたるところから放出可能。身に纏うことも出来るのを^{ディフェンスサンダー}利用し、電磁防御という技も開発してたりする。

「ンでエ？ どオして暗部なンかにいるンですかア？ その超電磁

砲を超えた派生電磁ちゃん？」

「さあね。君みたいに攻撃と防御の才能を買われたけど、どちらも中途半端に終わった『暗闇の五月計画』の被験者には言われたくないかな」

殺気を全開にしていた女也は、これで完全にキレた。夜鞠の首を掴み、ニタアと微笑む。

「さて、問題です。水を分解して爆発させる能力者である私が、水の塊である人体に触れたらどオなるでしょう？」

「うーん、肉片残さず吹き飛ぶかな」

危機感の無い様子で夜鞠はサラッと答えた。

「次の問題、今テメエが言うべき言葉は？」

少しの間を空けて、ようやく夜鞠の口が開いた。

「ごめんなさい女也ちゃん？」

なぜか疑問系で返す夜鞠に、傍観者の三橋は焦った。

「それでいいんだ」

女也が首から手を離れた。

直後、夜鞠の人差し指が女也の頭部を差した。まるで、自殺する時に銃口を頭部に当ててるような状態だ。

目を見開いた女也に対し、派生電磁は薄く笑った。

「問題です。今、君が言うべき言葉は？」

脅迫を脅迫で返すという大胆な行動に出た夜鞠に、女也は拳を強く握りしめながら睨みつける。

ここで三橋が止めに入った。

「止める二人とも。こんな狭いところで暴れるな。絹人も眠れなくてイライラ……」

三橋が絹人の方を見ると、いびきをかきながら気持ち良さそうに寝ている絹人の姿があった。

三橋の背筋が凍る。

「テメエ、喧嘩止めるとはいい度胸だ」

「外野は黙っててよ」

ペットボトルを持って近づく女也と、人差し指を突き出しながら近づく夜鞠から三橋は冷や汗を垂らしながら後ずさるうとする。しかし、背後はソファ。逃げ道は無い。

「こいつ死んだらリーダー私な」

「いや、僕だよ」

なにやら無駄に意気投合している二人。

次の瞬間、扉を打ち破って出て行く三橋と、それを追いかける音速で飛ぶペットボトルがあったのは言うまでもない。

暗躍するは血に染まる舞踏会（後書き）

三橋の説明忘れてた

そして、書く隙間が無い

出番も少ない。

勇里たちが入院中なので、暗部編が始まります。

経過壊し（前書き）

いろいろ更新遅れてました

経過壊し

この物語から一年前の話。

建てられたばかりの何も無い研究所で二人の少年が相対していた。片方は黒いパーカーを着込み、ダメージジーンズを履いている。

もう片方は白の生地には赤い装飾が施されているローブを羽織っていた。

まるで両者を別の世界の人間であるかのように正反対な色の服は、明らかな敵意をより強く示しているように感じられた。

黒いパーカーの少年が口を開く。

「記憶を……、返してもらおうか」

言い終わったと同時に右手を突き出す。その手のひらから真つ黒な霧が溢れ出した。徐々にそれは広がっていき、黒いパーカーを保護色のように見えなくし、白いローブを黒く染めていく。

まるでその世界がパーカーの少年に染められたかのように、世界は黒く霞んでしまった。

白いローブの少年は薄く笑った。

「それは無理な話だ」

「なんだと？」

黒いパーカーの少年が犬歯を剥き出しにして声をあげる。

「無理だ？ ふざけるのも大概にしる。お前のせいで、俺は家族の記憶も、友達の記憶も、大切な物の記憶が無くなってしまった！

ぼんやりと浮かんだ記憶さえもすぐに闇に飲み込まれて見えなくなる……！」

「知らない方がいい、ということだ」

感情を全く表に出さない白いローブの少年は、何一つとして動いていないハズだが圧倒的な威圧感がほとばしる。

パーカーの少年の背筋に悪寒が駆け抜ける。しかし、引くわけにもいかなない少年は大声を出すことに決めた。この威圧感を押し切る

「うるせえ糞野郎！！　お前みたいなキチガイなんか、ここでぶつ殺してやる！！」

「ふ、ふざけんじゃ……ねえ！」

次に、左手のひらから赤い霧が溢れて球体を形成する。

左手の球体を白いローブの少年に向けて放つ。

「無駄だ」

呆然とするパーカーの少年を一瞥すると、下に顔を向けて俯いた。

怪訝に思ったパーカーの少年が声を発する前に笑い声はおさまり、とても低い声で白いローブの少年は言った。

「理解出来ない？」

「それで、俺の記憶を！！」

白いローブの少年は顔をあげた。もともと顔立ちの良かったであろう西洋風の顔はひどくやつれていた。髪はボサボサに痛んでしま

ローブの少年はポケットから紙を取り出した。それを黒いパーカの少年に見せつける。

69

うに、長々と横書きされている最後の行に一言『god dead』と書かれている。

「なんだよ、それ」

謎めいた文章に黒いパーカーの少年はありきたりな問いをした。
それに白いローブの少年は答える。

「神をも殺せる呪いだ」

「……神？」

「そうだ。日本から伝わった東洋魔術にイギリス清教が手を加えた結果、このような形になった」

「なに？ 魔術？ イギリス清教？」

「疑問に思わなくともいい。ただ、神を殺せるということだけを頭に入れておけ」

「なんだソレ。俺が聞きたいのはそんな胡散臭い手紙なんかじゃなく、記憶を返せてことだ！」

「記憶は戻さん」

「は……？」

「この呪いが完成するまではな。私を捕まえた記念と冥土の土産だ。私の魔法名と能力について答えてやる」

白いローブの少年は小さく息を吐くと、右手を振り上げた。

「我が名は g u r k o p 2 6 7。死を賭して救う。ここでの呼び名は^{メルトメモリ}経過壊し」

「メルト、メモリ？」

「全ての経過を破壊、全ての過程を破壊、全ての過去を破壊、全ての全てを破壊する」

振り上げた右手を黒いパーカーの少年に向ける。

「絶対にして最強。私にかなう者無し。たとえ、学園都市の最高機関であっても」

「お前程度じゃ、風紀委員にすら倒されそうだがな」

「そうか。貴様を倒した後に、その風紀委員とやらを倒してみようか」

「ハッ。どうせ行動奪取アウトバタインの二人にボコボコだな」

「貴様は楽しませてくれるか？」

「楽しすぎて冥土に送ってやるよ」

それを言うと黒いパーカーの少年は右手の刃を白いローブの少年に向けて射出する。剣先はローブの少年を捉え、速さはまさに一瞬。だが、その刃はローブの少年に当たるところか、半分の距離さえも届かずに拡散しパーカーの少年の右手に戻っていった。

白いローブの少年は笑う。

「たとえどれほど強い攻撃であっても、過程と経過に過去を無くしてしまえば未来を失う。破壊される前の世界に戻され、また新しい未来のために動く」

歌うように続けた。

「攻撃は何一つ届かん。未来は幻想となり果て、過去に捕らわれるだけ」

「過去を無くした俺は未来に生きるだけだ！！」

黒いパーカーの少年は背中から金色の翼を生やす。まるで鳥のように羽さえ鮮明なフォルムは天使さえも連想させられる。

「俺の能力は科学汚染サイエンスハザード。生まれるはずの無いウイルスを生み出す能力」

その翼は天井を突き破り、がれきを落とす。

「一撃で殺す」

背中から生えた翼は柱を砕きながらローブの少年に襲いかかる。

ローブの少年は動かないまま言う。

「攻撃は届かんと言っただろう」

金色の翼の攻撃は届く前に消滅した。そして、破壊されたはずの天井や柱が逆再生したビデオのように戻っていく。

なすすべもないとはまさにこの事だった。

黒いパーカーの少年は床に手をつき、絶望するのみだった。

「哀れだな。科学に縛られた浅ましき者よ」

経過壊し（後書き）

ちよつと解説。

最後の金色の翼は黒いパーカーの少年の体の一部です。
ウィルスによって体ごと変えていました。

しかし、経過壊しによって全て巻き戻された、と。

感想などお待ちしてます

簡単なお仕事（前書き）

ユニーク1000人越えました！
読者の皆様、ありがとうございます！

簡単なお仕事

「で、今日の仕事はなんなんだよ」

「ゴミ廃棄用（に偽装した）の車の中、絹人は奇立ちを隠さずに、その場にいる全員に言った。

そして全員黙り込む。

「おいおい、誰も聞かされてねえのかよ!!」

「うつせエ!! 私も連絡が無くてイライラしてんだよ!!」

女也が怒声をあげる。そのまま会話は続かず、牽制しているかのように絹人と女也は睨み合い始めた。

しばし間を空けると、三橋が立ち上がった。

「へいへい、どうした？ 三橋」

絹人が睨む目を逸らして三橋を見る。女也が一瞬だけ、少し寂しげな表情をしていた。

三橋は後頭部をポリポリと掻き、携帯を取り出す。

「あいつのことだ。繋がるかは知らんが、かけてみる価値はあるだろ」

あいつとは、この『パーティ』を担当している学園都市の暗部だ。いつも電話に出ず、出たとしても眠いからと切ってしまう、はた迷惑な上司である。

「へいへい、どうせ無理だろ」と絹人は諦めた。いつものことだからだ。

携帯の電子音が複数回鳴らされた。だが、繋ぐボタンを押さない。怪訝に思った絹人が立ち上がり、三橋に近寄った。

「おいおい、なんで押さねえ？」

「実は、あの人が苦手だな……」

「はあ？ もういい貸せ」

三橋の手から携帯を奪い取った絹人はイライラをぶつけるように

乱暴に通話ボタンを押した。

耳にあてて、出るのを待つ。

待つ間に鳴るリズムのある電子音が、一回、二回、三回と続く。そして四回目が終わった時、「もしもし」と声がした。

女の声だ。しかし、可愛げがあるようでも透き通ってもおらず、喉に何か詰まらせているかのような低い声だった。

絹人は自分が誰かも名乗らず、早速本題に移る。

「そうそう、仕事はなんだ!!」

「うわ!? うっさいわね……」

カラン、と軽い音がした。アルミ缶のような音だった。

「へいへい、テメエ、昼間っから飲んでやがったな!」

「ゲホツゲホツ! ち、違うわ小僧!!」

「違うならさつき落とした物はなんだ?」

上司の女はたつぷりと間を空けて、一言だけ言った。

「ドミノ」

さすがの絹人も声が出なかった。

苦し紛れの弁解なのは分かるが、なぜドミノなのか。

「うんうん、分かった。ドミノな。とりあえずさつさと仕事の話しろ」

いちいちツツコミを入れるのも億劫になる上司の言葉を絹人は軽くスルーした。

「ドミノってなんのこと?」

夜鞠が天井の小型テレビから目を離さずに言う。

絹人は手を振って「苦し紛れの弁解だ」と告げた。理解したようで、夜鞠だけでなく三橋や女也までも頷く。

まるで信用が無い上司は、酒で酔った自分と自我を必死に繋ぎ止めていた。

「え、えとだな……。レベル2とレベル3の少数団体が、いろいろ裏で起こしてるらしいのら」

「少数団体?」

「そう。人身売買の店を襲撃したり、隠れ風俗店をめちゃくちやにしたり。武器専門店から火器銃器を強盗するとかね」

「ほう。どういう目的があつてそんなことしてるんだろつな」

「知らなーい。と・に・か・く！ さつさと仕事終わらせてきてー」
そして、一方的に通話が切られた。

いつものことから、と腹をくくっていたが、いくらなんでも投げやりではないか。

絹人は深くため息を吐く。

三橋がテーブルに乗ったポテトをつまみながら絹人に言う。

「仕事つてなんだつたんだ？」

「まあまあ、過激派の連中を駆除つてところかな」

近からずも遠からずな言葉を返し、絹人は壁についた小窓を開けた。

奥では運転手が競馬の中継を馬券片手に観戦している最中だった。

「そういうことだ。仕事」

「ちよつと待つてくれないか？ 今いいところなんだ」

言い終わつた直後、小窓から手が飛び出し、運転手の首筋を捕まえた。

手の持ち主である絹人は怒りの顔でただ単調な言葉で告げた。

「クロス」

アクセルを踏みつける音がした途端、車内が揺れた。車が走り出す。

絹人は腕を戻して小声で運転手に言った。

「へいへい、たとえ冗談だとしても俺をイライラさせる冗談は止める」

「ははは、ちよつとからかっただけさ」

この運転手もなかなか肝が据わっており、こんなことが今まで何度かあつた。ちよつとした日常になつてきている。

揺れる車内で、女也がなぜかびしょびしょに濡れながらコップを手に使っていた。白いワンピースが透けて下着が浮き出ている。胸のラインまで見えてしまっていた。

だが、本人はそれもお構いなしに絹人を怒鳴る。

「デメエがいきなり走らせたから濡れちまったじゃねエか!!」

「おいおい、人のせいにすんなよ。それはお前の不注意」

「んぐウ……!! 血風船にしてやる……!!」

と言いつつも女也は大人しく椅子に座った。こんな狭いところで爆発させたら女也自身も危ないからだ、ともう一つ。

下着が見えていることに気づいたからだだった。顔を真っ赤にして下着を隠す女也の気持ちを知らない。

仲の悪い四人を乗せながら車は走る。

……。

「ここか」

絹人たちが車から降りた場所は、巷で噂のショッピングセンターだった。性能などではなく、意外性のある生活用品を売っていることから目で見て面白いと評判の場所だ。

四人がショッピングセンターの前に突っ立っていると絹人の携帯から着信音が鳴り響いた。

callingー上司ー

上司からのようだ。

通話ボタンを押し、耳にあてる。

「ふわぁ……着いたみたいね……」

いきなりのあくびと眠そうな声。

（コイツ、寝てやがったな?）

怒鳴り散らしてやりたいところではあったが、場所が場所だけに怒鳴る気にはならなかった。

「ショッピングセンターの受付嬢に『八階のトイレはどこですか』
と言いなさい」

「は？ おいおい、ここには七階までしか無いぞ」

絹人の言う通り、階数は七まで。八階は存在しない。

「バカね……。暗号よ暗号」

「また面倒くさいことしやがって……」

「少数団体の奴らをおびき出す作戦らしいわよ……知らないけど」

「そうかよ。じゃな」

そして通話を切った。

「行き先は聞いたか」

三橋が声をかける。

「おいおい、当たり前だろ。あそこの受付嬢に」

「受付嬢に！？」

女也が絹人の言葉を遮った。

「……受付嬢に暗号を言うんだよ」

「あ、そオなのか……」

案外あっさりと退いた女也の顔は少し安心しているようだった。

「絹人君、敵はどんなのが相手？」

今度は夜鞠が声をかけてきた。

「そうそう、レベル2やレベル3の集まりだとよ」

「強そうだね。絹人君に、守ってもらおーかなー」

最後の言葉に女也が安心した顔を怒りに変える。

「て、テメエの身くらい自分で守りやがれ！！」

「えー、なんでえ？ 僕もレベル3だもん」

「猫かぶってンじゃねエ！！ レベル3でも実力は桁違いだろオが
！！」

「落ち着け女也」

三橋が中和しに入っていった。

絹人は心の中で「ご愁傷様」と手を合わせて拝んだ。

「夜鞠は能力以外は普通の女の子なんだ」

「私は普通じゃないって言いてエのかア!？」

「違っ!!　そういう意味じゃなくてだな!!」

問答無用、と女也が三橋を追いかける。

小柄な女の子が巨体の男を追いかけ回すというシユールな絵面に、絹人は思わず吹き出してしまった。

「あいつらバカみてえ」

「バカなのは君だと思っな」

この騒ぎの原因が第三者のように絹人の隣に立っていた。

「俺がバカ？」

「そっだよ。これじゃ、女也ちゃんが可哀想」

「は?　どういう意味だ」

「ふふ、そういうところがバカなんだよ」

結局、絹人は意味も分からないまま騒ぎはおさまった。

V S 少数団体

「八階のトイレはどこですか」

建物に入った絹人たちは真つ先に受付嬢へと近づき、上司から教えられた通りの『合い言葉』を言った。

受付嬢はしばらく怪訝な顔を見ると、受付近くのエレベーターに乗るよう指示した。

絹人たちがエレベーターに乗り込む。そこで、怪しい人影が曲がり角からこちらを覗き込んでいた。

（少数団体か……）

絹人は無表情のまま視線を逸らす。

次に受付嬢が乗り、階を選ぶボタンの下にある鍵穴に鍵を差し込んだ。開くと、中には『8』のボタンが赤く光っていた。

（隠しボタンか）

そのボタンが押される。エレベーターは動き出し、上へ上へと上がっていく。

浮遊感はない。まるで止まっているようにすら思える。

「へいへい、八階には何があるんだ」

肩を叩き、受付嬢に話しかける。

しかし、受付嬢は持ち前の業務用の笑顔を浮かべるだけで質問には答えない。「お楽しみに」という一言で会話を終わらせた。

誰一人として喋らず、八階に着いた。

扉が開く。

カビ臭さが鼻をつく。見渡しても特に何か置物をしているわけでもなく、木箱の上にキャリーケースがポツンと一つ置いてあるだけだった。

この光景に首を傾げる。

「あなたたちはあのキャリーケースを守ってください」

ロボットのよう感情の無い声でそう言い残し、受付嬢はエレベ

「ターに乗って下に降りて行った。

絹人はため息をつく。

開口一番は三橋が持っていた。

「現れるか分からん敵からこのケースを守らねばいかんのか？」

「そうなんじゃない？」

夜鞠が同じように疑問を口にする。

そして、一階では

……。

中学生や高校生ぐらいの男女八人が受付の前に集まっていた。

「八階のトイレはどこですか」

その中でも一番に背の高い青年が受付嬢に詰め寄るように告げた。

受付嬢は業務用の笑顔を浮かべてエレベーターに促した。

八人が乗り込んだエレベーターの中、背の低い少年が言った。

「ほ、本当に大丈夫なのか？ 終夜^{しゅうや}」

その言葉に一番背の高い青年である終夜迎^{しゅうやむかい}は鼻で笑う。

「相手はたかが四人。しかも超能力者^{レベル5}どころか大能力者^{レベル4}すらいねえ。

この人数なら楽勝だ」

「そ、そうだよな！」

その自信溢れる言葉に、やや不安がっていた周りの男女たちが喜びの声をあげる。

そんな中、言い放った終夜本人は誰よりも不安を感じていた。

（『あれ』を手に入れて、本当に学園都市を出し抜けるのか？）

……。

「どうやらご到着らしいぜ」

絹人はエレベーターを指差す。

高い鈴のような音と共にエレベーターの中から風が巻き起こった。部屋中のほこりを押しのけ、絹人たちさえも吹き飛ばす。

「おいおい、不意打ちってアリかよ……」

足に力を込め、踏ん張って流されないようにこらえる。間もなく風はやんだ。

舞い散るほこりの中から八人の男女が現れた。

どれも不良じみた派手な服装をしており、統一感の無さはまさに個人個人の個性だった。

一番背の高い青年『終夜迎』は右手を閉じて突きつける。

「出せ」

「は？」

絹人はおろか、他の三人も首を傾げた。

「あるのは分かってるんだ！！ 書類だよ書類！！ 持ってるんだろ！？」

今度は大声をあげて言ってきた。

ピンと来なかった絹人だったが、その『書類』という単語でやつと気づく。

（ああ、キャリーケースか）

先ほどの風で落ちたのだろう。木箱の裏に隠れて相手からは見えなくなっているキャリーケースを一瞥する。

青年に視線を戻すと、突きつけた右手の周囲に淀んだ霧のような空気が集まり始める。そして、右手が灰色の霧に覆われた。そのまま霧は形を変えていく。

終夜は右手から灰色の竜を作り出した。

絹人が身構える前に、女也が竜の前に立った。

「おいおい！ なにしてんだ女也！！」

叫ぶが、答えを聞く前に灰色の竜は女也を食らおうと大口を空けて迫る。

対して女也は右手を突き出す。

「女也！！」

しかし、女也の右手に触れた竜は形を失い水に変わった。

「えっ……？」

絹人が助けに入るまでもなかった。

女也は振り返らずに言った。

「私はなア、元素を分解出来るだけじゃアなく、くつつけることも出来るンだよ」

「なぜ、僕的能力が……？」

終夜が声を震わせて言った。

「あン？ テメエのレベルは幾つだ」

「強能力者……だ……」

「やっぱりそオカ。いやな、単純な話なんだよ。水素がテメエの右手に集まってる時、能力がまだ未熟なせいでホコリまで巻き込んだ」

「確かに僕的能力は水素を操作する。そして水素は軽い気体だ。だからこそ、それを隠すために風で奇襲を！！」

「はア。人の話を最後まで聞けよ。テメエ、ホコリを巻き込んでる最中、水がこぼれ落ちてたンだよ」

「み、水……？」

「そオだ。能力を調節出来ずに結合させちまったンだろオ」

水素と酸素は結合すれば水が出来る。単純な問題だった。

女也たちは終夜の演算が未熟なおかげで命拾いしたと言ってもいい。

女也は先ほど竜だった水を手ですくった。

「まア、その未熟さが欠点だったンだろオが、その欠点は違う方法で力を発揮できる」

すくった少量の水を八人に向かって放り投げる。

「水素爆発」

その水は一瞬青く輝くと、一度消え、すぐさま光る。そして爆発した。

熱風が吹き荒れ、粉塵が舞う。

「まさか……殺したんじゃ……」

三橋が爆風をもともせずと言った。さすが巨体というところだろう。

あの八人の男女の姿は灰色の霧に覆われ、輪郭の影すらも見えなくなっていた。

女也は笑う。

「殺すに決まってンじゃン」

楽しそうに弾む声が響く。

「でもよオ、この程度で死なれたンじゃ最高につまらねエ！ 生きてンだろ！？ 雑魚どもオ！！」

女也の声が耳に焼き付いた爆音をかき消した。

「ああ……生きてるさ……！！」

その声に呼応するかのようにかすれた声が聞こえた。

灰色の霧が取り除かれると、そこに立っていたのは三人だけだった。

終夜は生きていた。

「命に別状は無いよ……。みんな気を失っているだけだ」

「チッ」

女也が舌打ちをする。

「その様子だと本当は殺す気は無いみたいだね」

「ンだと？」

「君がすくった水は少量だ。もっと拾えば僕たちを肉も残さず殺せただろう？」

「自爆だけは嫌だね。ただの計算ミスだ」

終夜は力なく笑う。

「そうか。でもね、こんなチャンスを逃すわけにはいかないんだ」
「死になさい!!」

終夜の背後から女の子が飛び出し、炎を放った。
パイロキネシス
(発火能力か)

余裕綽々という風に絹人は能力を分析する。

その炎は真つ直ぐに女也に向かっていく。

だが、その炎は光る玉に弾かれ消えた。

「えっ」

「はいはい！ 真打ち登場！」

今まで黙っていた夜鞠が顔を出した。両手の五本の指から電流を
発し、女也の横に立つ。

相手の女の子は目を丸くしたあと、一歩後ずさる。

「まさか……操作系電磁砲？」

「そんなに有名なのかな？ 照れちゃうなー」

「き、聞いてないわよ……。あんな化け物があるなんて……」

「聞いてないのは当たり前かな。能力を見た人はみんなこの世に
いないしっ」

夜鞠は可愛い顔を笑顔に変えた。

しかし、その笑顔の余裕が恐怖を加速させる。

女の子は肩を震わせながらも、両手に炎をまとう。

「た、たった一つのレベル差よ……。これぐらい!!」

夜鞠に向かって炎が放たれる。

「あー、ダメだめ。なっていないなあもう」

夜鞠は右手の五本の指をクイツと振る。すると、指先から玉が発
射され、ひかれ合うようにぶつかり、弾かれを繰り返す。それはド
ンドンとスピードを増していく。

「名付けて、サンダーウォール玉電の壁！」

徐々に形を整えていく玉電の壁。それは最速になると、本当に電
気で出来た壁と化した。

炎はそれに当たると燃えもせずに消えた。

「う、嘘……」

女の子が固まった。

それもそうだろう。まるで利かなかった炎攻撃だが、これが女の子による最強の一撃だったのだ。それをいともたやすく掻き消す物に絶望を抱かないのもおかしい。

「決定的な差だよ」

夜鞠は『無邪気に見える』邪悪な笑顔を女の子に向けた。

V S 少数団体（後書き）

V S 少数団体「2」に続く……。

V S 少数団体 2

「そろそろ俺たちも参加しよう」

三橋は壁を勢いよく殴りつけ、一歩前に出た。

相手も同じ意見のようで、小柄な少年が歩み寄る。

その格好は異様で、ゴムのような布にチューブが這っている物を手足に着けていた。

少年は息を大きく吸い込む。そして

「武藤時久！！ 勝負お願いしますす！！」
むとう たけひさ

叫んだ。

耳鳴りが多少起きるほどの大声だったが三橋は顔色も変えずに一度止めた足をまた動かす。

時久は先ほどの大声も虚しく感じるほどに怖じ気づいた表情をしていた。

三橋は壁を蹴る。

「な、何をしてるんですか……？」

怖じ気づいた表情は疑問へと変わりつつあった。

対して三橋は簡潔に答える。

「下準備だ」

その言葉が発せられた瞬間、三橋の立っていた位置に小規模のクレーターが生まれ、三橋が消えた。

時久は目の前ではなく、右横を見る。

「そこですね！！」

そして右に向かって拳を放つ。

それは轟音を響かせ、風を起こす。

「なぜ分かった？」

時久の拳には三橋の拳がぶつかっていた。

タイムストリッパー

「僕は予知能力者なんですよ」

「なら、なぜ拳を受け止められた？」

三橋は蹴りを放つ。

それは時久の腕に受け止められた。

「自分にかかる反動を最小限に抑え、逆に相手に反動を押し返す手袋を着けてるから、ですかね」

「似たような物だな」

三橋は掴まれた足を無理やり振りほどき、また一瞬見えなくなるほどのスピードで後ろに飛んだ。

「俺の能力は衝撃吸収ダメージカウンターと言ってな。受けた衝撃を体のどこからでも好きな時に出すことが出来る」

「生身を干渉材にして衝撃を体の中に閉じ込めるような物ですか」

「違う。根本的にはお前と同じと考えてくれていい」

「なるほど」

そしてお互いに地面を踏むと、目にも止まらぬスピードで激突した。

……。

「はあ……。へいへい、こんな狭いところでドカスカバカスカよくやるねえ」

絹人は壁にもたれつつ、三人の戦いを見ていた。

その中、通る隙間も無いであろう戦いの渦中から青年が歩いてきた。

「テメエの相手は俺だ」

たった一言、それを言い終わった直後に腕に切り傷が走った。

「イツッ……」

「俺は温度を自在に上げ下げ出来る能力『ウィンドマスター気温操作』」

「はいはい、なるほど。かまいたちか」

「物分かりがいいようだな。君にとっては生憎だが、先ほどから仲間たちが騒いでくれてるおかげでそこら中に風が起きている」

「おいおい、それじゃ逃げ場無しかよ」

「つまりそういうことだ」

左右からかまいたちが巻き起こる。床や壁傷つけながら絹人に迫る。

だが、

「まあまあ、タネが分かれば楽勝だな」

両腕でかまいたちを殴りつけ、分散させる。分散したかまいたちは自然消滅するまで壁に体当たりしていた。

相手の気温操作は笑う。

「なんだデメエの能力は？ 素手でかき消すなんてよ」

「摩擦無視」

「摩擦か。なら無理なわけだ」

「へいへい、分かったか？ 分かったならさっさと諦めろ」

「そうは行かない。俺にもやることがあるのでな」

唐突に体が冷え始める。

それも、内側から。

「なんだ……これ……」

「君の内臓を凍らせようとしているだけだ」

胸から腹部にかけて、まるで氷を入れたかのような冷たさがこみ上げる。そしてそれは更に冷たくなっていく。

「早く動かないと血まで凍り、終いには動けなくなるぞ」

「クソッ……」

絹人は気温操作に向かって走り出す。

「特攻すれば勝てるか？」

今度は四方八方からかまいたちが襲いかかる。

（避け、きれない！！）

絹人は摩擦無視を体中に貼ることは出来ない。出来るのは半身分

ぐらいの大きさのみ。

迫るのは四方八方。とても半身では受け止められる数ではない。

(なら!!)

絹人は走る足を止める。

すぐに足に能力を使い、床に穴を開けて落ちたのだった。

摩擦無視を使っていなかった両腕を落ちる寸前に伸ばし、なんとか端に手を置くことができた。

「無様だな」

気温操作は落ちそうになっている絹人を上から笑う。

そして命綱である腕を踏みつけ始めた。

「オラオラどうしたあ!？ さつさと上がらねえと落ちんぞ!？

それとも、能力使っちゃダメなのかあ？」

挑発するような気温操作の声に絹人はかなり苛立っていた。

手は現在進行形で痛めつけられている。血ならとつくに流れていた。

「へいへい……いい加減にしとけよ」

「あゝ？ 弱者は黙ってな!!」

V S 少数団体 2 (後書き)

短くてすみません

いつもより早くに続き出すので勘弁を

V S 少数団体3（前書き）

前の分を含めて長くしました

VS少数団体3

「がああああああつ!!」

絹人の体が不自然に浮き上がった。

そのまま気温操作に激突し、吹き飛ばす。すぐに四つん這いになり衝撃を受け止め絹人を視界に収める。

絹人は地上に立っていた。

「デメエ……どうして……？」

気温操作は呟く。

だが絹人は答えない。

代わりに両腕を軽く振っただけだった。

その動作と同時に気温操作は床に叩きつけられる。

「グアツツ……!!」

吸い込んだ息を全て吐き出し、めまいを起こす。

「摩擦、無視……そのはずだ……」

気温操作は顔を上げる。

ちょうど、絹人が足を上げて気温操作の顔を踏もうとしてるところだった。

「なにが起こって」

絹人の足が下の階ごと床を吹き飛ばした。

気温操作の顔の真横。わずか数センチの間。

そして、ぽつかりと空いた穴の奥では下の階の床のほとんどが無くなっていた。

「はズしたかあ」

絹人の冷たい言葉で全身に悪寒が駆け抜ける。

（コイツ……まともじゃねえ……）

即座に後ろに飛び、かまいたちを起こす。

だが、絹人に届く前に全てかき消された。

「あーあ、また始まった」

気温操作の後ろでは女也がため息を吐いている。

「死ぬぞ？」

その女也の警告を頭に入れるのに時間はかからなかった。

「さてさて、ドウ潰スかな」

後退ろうとする気温操作の足が浮いた。転ぶと同時に絹人の方へ引きずられる。

（なん、なんなんだよ！？）

床のタイルを掴み止めようとするが掴めない。

必死に、床を掻き、暴れる。

ついに絹人の足元に着いた。そのまま体が浮き、片手で首を掴まれた。

「がはっ……あぐっあっ」

とてもこんな細っこい人間に出せる握力ではなかった。首のあらゆる物がギチギチときしむ。

絹人は空いた腕を振るった。すると、床や壁の破片が砕かれ、鋭利な刃物となる。

それを苦しみながらも見ていた気温操作は固まった。

（う……嘘だろ？ 待ってくれ、待つ）

数十の刃物が気温操作を貫いた。

「ひっ……」

気温操作は声にならない声で泣いた。

その姿は体中から刃物が飛び出し、アイアンメイデンを裏返したようなおぞましい物になっていた。

絹人は先ほどの腕を気温操作に向かって伸ばし――――――

……。

「助けなくていいんですか？」

時久は構えを取りながら言った。

「ああ、大丈夫だ」

対して三橋は顔色一つ変えず質問を流した。

その二人の後ろでは必死にしがみついている絹人とそれを嘲笑う気温操作の姿があった。

時久は笑う。

「非情なんですね」

「信頼だ」

三橋は笑い返した。

それと同時に二人の横を気温操作が転がっていった。

「なっ……！」

「よそ見るなよ」

三橋の拳が時久の顔面に伸ばされる。間一髪というところで体をずらして回避した。

空を切った三橋の腕を時久は掴む。

三橋はその腕を強引に引っ張った。

「うわっ!？」

時久は投げ飛ばされた。壁にぶつかり、床に倒れる。

「ぐうう……ッ！」

うちどころが悪かったのかすぐには起き上がらない。

「一瞬、お前はあの二人の未来を見ようとしたのが運の尽きだった」

「クソおおおおお!!」

痛む体を無理やり動かし、時久は三橋に向かって走り出す。

時久は何度も蹴りを放つ。しかし、三橋にダメージは無い。

「だてに体は鍛えてないぞ」

三橋は時久の腹に触れる。

鈍い音と共に時久は吹き飛んだ。

頭から壁に激突する。

「衝撃吸収を持つ能力者なら、体ぐらいいは鍛えておかないとな。意味が無い」

三橋が言い終わった直後、時久は立ち上がる。

額から血を流し、視線の定まらない状態で。

「勝たなきゃ、いけない……」

「頭が割れてしまうほどの怪我だぞ。なぜ立ち上がる？」

「僕は……ぼく達は……自由を手になくちゃ……」

「自由……か。お前の見る未来にその自由はあるか？」

三橋の言葉に時久は動きを止めた。

時久は薄く笑ってみせると呟く。

「そうか……あんた達が救ってくれるのか……」

そして、倒れた。

……。

発火能力の女の子と戦闘している夜鞠は、完全に優勢だった。

「もう、遊ぶの疲れたよ」

あくびをしつつ弾かれる炎を見る。

「何か攻略法は無いの………？」

発火能力は肩で呼吸をする。

何度も何度も炎を打ち続け、ついに限界に近くなってきた。

どの角度から撃とうとも必ず弾く玉電の壁。

絶望以外に見いだせなかった。

「君のセリフ、もう聞き飽きたフレーズだよ。もっとひねってひねって」

夜鞠は楽しそうに言う。

「勝てる見込みなんか無いよ？ 万に一つも無い。たとえあつたとしても、君には掴めない」

「まだ……諦めない」

「どうして？」

「あんた達が隠し持つてる物には、あたし達の希望がある」

「ふーん」

「軽い気持ちで……人の自由を……終夜の希望を……邪魔してんじやないわよ！！」

発火能力の両腕に炎が纏った。それはどんどんと長さを伸ばし、まるで剣のようになる。

「ああああああああああああああああああ！！」

その炎剣を玉電の壁に叩きつける。壁を形成する玉が一つ、また一つと消えていく。

「あ、ヤバいかも」

炎剣は予想通り玉電の壁を突破した。

「これで、トドメッツッ！！」

炎剣を夜鞠へと突く。

それを夜鞠はくるっと一回転し、避けた。

「全くう、威力は充分んだけど爪が甘いよ」

隙だらけになった発火能力へ向けて、人差し指を差す。

「じゃあねっ」

指先から玉が発射され、発火能力の腹に音速でぶつかる。

そのまま玉に押されるように飛び、エレベーターの扉に勢いよく衝突する。

そのまま悲鳴もあげずに床に伏せた。

玉の当たった部分からは焦げたかのように煙が上がっていた。

……。

女也の後ろで絹人と戦っていた気温操作に忠告をした後

「ンで、テメエの能力が効かない私にどうやって勝つンだア？」

女也は終夜に問いかける。

だが終夜は黙ったままだった。

「死ぬ覚悟でも決めたかア？」

「いいや」

終夜がようやく口を開いた。

「俺にはやらなきゃならないことがある。たとえ死ぬ運命だとしても、それを乗り越え、皆のために手に入れなくちゃならないんだ」

「なに言ってるんだ」

「書類だ。そこには、俺たちの記録がある」

「記録？」

「せめてもの情けだと思って聞いてくれ」

終夜は神妙な面もちで語る。

「昔、このメンバーで暴れたことがあってな。死傷者を出すほどだった。そこを学園都市につけ込まれた。表には出さないようにしてやる。だから学園都市の裏で戦えと。汚い物を何度となく見てきた。暗殺から何まで。たくさんだ。だから、その書類を処分して自由を手に入れる」

「はア……」

ためていた物を吐き出すかのように女也はため息をした。

「テメエ、それでいいのか？」

「な、なにが」

「聞いてりゃあ、ただのガキのわがままじゃねエか。自分の過ちにつけ込まれた。もう嫌だ。何も無かったことにしよう？ 笑えねエ。自分で言ってる恥ずかしくなかったのか？」

「それしか方法が無いだろ！！ 仲間たちが幸せな未来へ向かうために！！」

「甘ったれてンじゃねエよ！！」

「幸せな未来イ！？ 死ンだ奴らを見殺して幸せに暮らそうとか馬鹿にしてンのか！？」

「結局はただの自己中じゃねエか。きれいな事をさんざん並べて筋を見て見ぬフリしてた。そんな奴に仲間がどうか言つてほしかねエ！！」……書類ならくれてやるよ」

「だけどなア、それ持つて警備員に出頭すれば許してやる」

「あ？ この期に及んで自分の身が大事かよ」

「当たり前だ！ 築き上げた成績をこんな下らないことで落としてたまるか……」

「やつと本性表しやがつた。やつぱりな。仲間だとか言つて本当は自分だ。ンで、なにが下らないってエ？」

「この茶番全てだ！！　あの紙切れ一つで何もかも幸せになるんだ！！　そのなにか悪いって言うんだよ！？」

「知るか！！ 邪魔だ、邪魔だ邪魔だああああああああああああああああああ！！！」

その竜の頭はどんどん膨らみ、部屋を飲み込むほどに大きくなる。

「クソ野郎が……、何も知らないお前の言うことなんか聞くかよおおおおおおおー!」

女也は右腕を突き出す。

右腕に触れた竜は一瞬で水に変わり、床を湿らせる。

酸素と水素を結合したせいで酸素濃度が少し薄くなった。

「ケホツケホツ！」

女也は咳き込む。

終夜は膝をついた。

「はぁ……はぁ……どうして、邪魔するんだ……」

涙を流し、女也に訴えかける。

「テメエが……昔の友達に似てたからだ……」

「友……達……？」

「私は……ソイツを救えなかった……。だから今度は……私が救う
って決めたんだ」

その女也の脳内に映るのは、白髪の少年だった。

暗闇の五月計画で見かけた少年。女也がまだ実験を終えてないこ
ろ、出会った少年だった。

「ソイツは……学園都市の闇につけ込まれた。そして、何もかもか
ら逃げてた……。遊びに誘えば断られたがな……。それでも友達のつ
もりだった」

「そりゃあ、お節介だぞ……」

「全くだ……。けど、黙っていられなかった。力を使って助けよう
とした。したらソイツの能力でコテンパンに倒されたよ」

「相手は友達以下として……見てたらしいな……」

「そオかも知れねエ。でもな。もう見るのは嫌なんだ。あんなつら
い姿。だから、この闇からテメエを救ってやる」

「救う？ どうやるんだよ」

終夜は鼻で笑った。

今まで終夜たちはいくつもの手を使ってきた。それでもどうにも
ならなかった。

何も知らない女也に何が出来るのか。

「とつても簡単なことだ」

女也は走り出す。拳を掲げて。

「ハッ！ なにかと思えば黙らせる気か！？ 何も考えてなかった
馬鹿らしい考えだな！！」

「そうさ、たとえ世間から人殺しと呼ばれよオと」
女也は少年との過去を思い返す。

「周りから冷たい目で見られても」
少年に向けられた視線を思い返す。

「自分から傷つくのを恐れていたとしても」
あの怯えたような顔を。

「必ず救いはある！！」
少年を遊びに誘った時のことを。

終夜は両腕で顔を隠す。女也の拳をガードするつもりなのだろう。

「これが、救いだアアアアア！！」
女也の背にあった水が爆発した。そのまま前に押し出される。
「ッ！？」

女也の拳は終夜の両腕を強引に突き抜ける。
そして、

終夜を殴り飛ばした。

そのままゴロゴロと床を転がり、壁に激突して停止した。
終夜は有無も言わぬまま気絶した。

……。

「あつ、あれ」

絹人が元に戻ると天井が見えた。

立ち上がり、状況を確認する。すると、目の前に体中に刃物の突き刺さった気温操作が倒れていた。

辺りは血まみれ。煙たい臭いも充満していた。

「正氣に戻ったか」

三橋は絹人の横で頭から血を流している時久に緊急処置を施していた。持っていたハンカチで傷口を塞ぐ簡単なものだ。

「そこに倒れてる奴だが、どれも急所を外していた」

「ああ、そう……」

いまいち実感の湧かない絹人は曖昧な返しをした。

「お前はソイツの頭を掴んだと思ったら、いきなり倒れてな。正直、それ以上のことにならなくて心配したよ」

それ以上のこと。絹人の体に悪寒が走った。

（いつもだ。いつも、なぜか戦っている時にだけ意識が途切れる）

「邪魔だデメエ」

女也が絹人の肩を押し、横を通った。

そして落ちていたキャリアケースを開くと、そのまま燃やした。

「あ、おいおい！ それを守るのが役目だろ！」

「も才いらねエだろ」

焼けて灰になった紙を床に落とす。

「おっ、警備員を呼んでる人はっけーん」

夜鞠が窓から外を覗いていた。

「好都合だ。サッサと帰ンぞ」

「へいへい、何がなんだか分からないんだが」

「なアに、コイツらに全て罪をなすりつけンだよ」

女也の顔は言葉とは裏腹に朗らかな笑顔だった。

絹人は府に落ちないまま女也に連れられエレベーターを降りる。

四人とも車の中まで無言のままだった。

……。

「ん……」

終夜は目を覚ました。

まだ他の人間は気絶していた。

「そうか…… 負けたのか……」

立ち、落ちたキャリーケースに近づく。

中身は黒く焦げた灰だけだった。

「まさか…… 書類を消したのか？」

仮説だった。だが、キャリーケースを置いて書類だけ持って行くのも考えられない。

そして、この灰が元は書類だったと半信半疑だった。

「救い……か」

「終夜迎」

後ろからくぐもった声が聞こえた。

ゆっくりと振り返る。

そこには顔全体を覆うマスクに分厚い装甲を着た三人組がいた。

どれもアサルトライフルを持っている。

性別までは分からないが、名前を呼んだのが男だということは分かった。

終夜はキャリーケースを突き出し、言った。

「書類なら消したぞ。これでお前らとはおさらばだ」

「今更そんな物はない。今はこのデパートの損害でまた戻ってもらうだけだからな」

「なに？」

「なぜこんな機密情報がお前たちに回ったか分かるか？ 手に渡る前にもう一つ鎖を付けておこう、ということだ」

「ここで戦わせて…… わざわざおっぴらにするつもりで……」

「そうだ。レベルが2や3の集まりだ。手放すには惜しいだろう？」

すでに警備員が出勤している。さあどうする？　このまま捕まり、今まで積み上げた成績を落とすのは嫌だろう？」

「そつだな……」

「さあ決まりだ。仲間なら他の隊に」

「だが!!」

男の言葉を終夜は遮った。

「もう戻らない」

「……本気か？」

「本気だ。成績が落ちようが、なんと言われようがもうウンザリだ!!」

終夜は力いっぱい叫んだ。

「いらない物を捨てるために。」

「自己中なんかじゃなく、本当の救いのために。」

「そうか。とても悲しいよ。優秀な人材を亡くすことになるなんて」

男はそう言つてアサルトライフルを構えた。他の二人も構える。

銃口は終夜に向けられていた。

「たしか、もうすぐ警備員が来るんだつたな」

「それがどうした？」

「俺が死ぬことでアイツらが助かるなら本望だ」

「そう言つて、終夜は腕を広げた。」

「さあ、撃て!!」

「お前を殺したあとにソイツらも殺してやるよ!!」

アサルトライフルの引き金に指が……

男以外の二人が床に伏せた。

「なっ……!!?」

「終夜!!」

男の後ろから気絶していた仲間たちが起き上がっていた。何人かが能力を使ったようだった。

男は肩を震えさせる。

「な、なんだと……？」

「もう迷わない。これが俺の選択だ……！」

終夜は水素の竜を作り出す。

男は慌てて引き金を引いた。しかし、水素の竜に全て受け止められ、終夜は無傷。

「虚空の幸せより必要なものがある……！」

竜が男を飲み込んだ。

狂気の顔に優しさの仮面

四人は車の中で各々の趣味に没頭していた。

絹人は『break rider』というレーシングゲームをしている。レーシングと言っても操作している物は人型ロボットだ。ふくらはぎ部分に取り付けられたジェットを噴射し、足の裏に着いているローラーで走る物なのだが、軽く格闘ゲーム要素も入っていたり。敵機を掴み殴り飛ばす。そして場外でスリップさせる荒技など。学園都市の近未来物という設定らしいが、今の学園都市ならこれぐらい作ってもおかしくないと考える。

「おいおい！！　なんで一位になった途端にCPU全員からミサイル攻撃！？　一気に最下位とかふざけんな！！」

「あアー！！　うつせエー！！」

絹人のうるさすぎる愚痴に喝を入れた女也は持っていた丸い機器に視線を戻した。『ペットの育て方』というなんとも可愛らしいタイトルで、内容もほんわかしている。ペットを大会に参加させたり、散歩から旅行も出来るし歳もとる。犬や猫、この機器に入っているペットの全てに一千種類以上の行動パターンを内蔵しており、まず飽きない。グラフィックも動きも全てリアルで、まるで本当にペットを飼っているような気分になさしてくれる。

いつもこれをするたびに女也とは思えないほど優しい顔になるのだが、本人は気づいていない。しかし周りは完全に認知していた。

「はア……可愛イ……」

と呟くと同時に他三人が女也を見る。女也は顔を真っ赤にして「は、ハワイ」と歌いだした。ごまかせていないのは丸分かりなのだが、見ていて面白いということで黙っている。

「ハワイに行きたいのか？」

三橋がパンフレット片手に話しかけた。

「えっ！？　あ、あア！　そオだよ！」

動揺しつつも女也は首を縦に振る。

「なら、三泊四日のハワイの旅っていうのがあるぞ」

手に持っていたパンフレットを真ん中の机に広げる。女也だけではなく、絹人と夜鞠もパンフレットに興味を向けたようで、一旦ゲームを止めてパンフレットを見る。

三橋は値段のところを指差し

「三泊四日で三万だ。食費代もそこに入ってる」

「それって安い方なのか？」

「安い方だとは思うが……」

三橋がパンフレットを持っていたのは、何気に独り旅を夢見ているからである。どれも海外旅行ばかりだった。なぜなら三橋はアメリカとフランス語はペラペラと話せるので、それを試してみたいという思いから。今はコツコツと貯金をしている真っ最中である。

「どうだ？ 結構いいだろ？」

「おい、よく見てみる三橋さんよ」

女也が値段の下にある小文字の部分を指差す。

「一人当たりは三万だが、ペアのみじゃねエか！」

「す、すまん」

「へいへい、女也は彼氏すらいねえもんなあ」

絹人が冷やかしに入ってきた。ペアのところで女也を交互に見て、腹を抱えて笑い出した。

女也はまた顔を真っ赤にする。

「じゃアテメエと一緒に来やがれ！！」

そこで女也はハッと気づく。

これじゃあまるで一緒に行きたいみたいじゃないか、と。

そんな気持ちも知らず、絹人は深読みもしてなかったのか片手を振った。

「おいおい、こんな悪女となんか一晚どころか一分も一緒にいらねえよ」

絹人はまた笑い出す。

ついに女也は声をあげて喚かなくなった。

「……………べ、別にテメエなンかと思いたくねエやい」

「へいへい、なんか言った？」

絹人がまた笑い出すのを尻目に三橋はまたパンフレットに目を通した。

「ねえ三橋」

夜鞠が携帯型テレビを三橋に向けながら言った。

パンフレットを閉じ、画面を見る。

「ハワイ……グルメの旅？」

「そうだよ。僕ね、ああいう南国の料理を一度でいいから食べてみたいんだよね」

夜鞠は目を爛々と輝かせ語る。

大の食べ物好きである夜鞠は、まだ食べたことの無い物ならなんでも食べてみたいという欲求がある。表通りに立ち並ぶクレープ屋から裏通りにひっそりと経営している居酒屋まで。とにかく新しい感動が欲しい。

だからここで夜鞠は三橋に頼む。

「二人でハワイ行こつ！」

絹人と女也がずっこけた。ソファから滑り落ちていく。

三橋は固まったままだった。

「ねえ、どうなの？」

「え、いや、その……」

唐突な要求に三橋は困惑し、慌てる。

「俺は……付き合ってもいない女の子と行くのはちょっと……」

「じゃあ付き合おうよ！」

ついに三橋までずっこけた。

「あ、あのなあ！ 別に恋愛感情も無い奴と付き合えるわけないだろっ！？」

「なんで？ お試していうのもあるし、大丈夫なんじゃないかな」
「お試して、しかも付き合ってすぐに海外旅行するカップルがどこにいる！？」

「むう……。それもそうだね。分かったよ。クラスメートの女の子でも誘ってみるよ」

「ま、まあ頑張ってくれ……」

ペアというのは大抵、男女のことを差すはず。言いたいことを全て引っ込めて三橋はパンフレットに視線を移した。

……。

「さてさて、家に着いたし。またな」

絹人が車から降りた。場所は高層マンション。一際目立つ高さで、学区内では有名なところだった。

絹人はエレベーターに乗り、十二階のボタンを押す。ぐんぐんと上がっていくのが肌で感じられ、少しの浮遊感を味わった。

間もなくエレベーターの扉が開き、絹人はエレベーターを出てすぐ左の扉に鍵を差し込む。扉を開けると、暗い廊下の奥にある扉から光が漏れていた。

「ただいまー」

絹人の言葉に反応したかのように光が漏れている扉の奥からガタガタと音がする。

「おかえりお兄ちゃん！」

扉が勢いよく開け放たれ、小さな女の子が飛び出した。女の子は絹人に抱きつく頬をお腹にすりすりとしりとりつける。

「おいおい、優奈。あんまり騒ぐなよ」

絹人が優奈と呼んだ女の子は絹人の実の妹である。

「だってお兄ちゃん遅いんだもん」

「ごめんごめん」

優奈の目線まで腰を下ろし、頭を撫でる。優奈は嬉しそうに「えへへ」と笑った。

「ごめんな。兄ちゃん、お仕事が忙しくて」

「ううん。優奈もさつき帰ったとこ！」

妹の、まるで恋人を待っていた時のようなセリフを聞き、絹人は照れたように視線を逸らした。

腰を上げ、優奈の肩をポンポンと叩く。

「ほらほら、お兄ちゃん疲れたから家にあがらせてくれ」

「うん！」

優奈はスリッパを絹人の前に綺麗に並び揃える。

「ありがと、優奈」

別人かと思えるほど優しい笑顔と口調。それは妹の優奈にしか見せない顔だった。

優奈もまた、兄の絹人の前では本当に嬉しそうに笑う。

「前はごめんな。帰ってこれなくて」

「いいんだよ！ お兄ちゃんが無事に帰ってきてくれれば！」

前、とは行動奪取と戦い少年院に入れられた時のことだ。脱走し、気づいたら昼間まで寝ているなんてマヌケな話だと思い出しても笑いが込み上げる。

仲が良さそうな兄妹なのだが、絹人は数年前から過保護じみた事をしている。

例は、優奈を泣かせた子供たちを片っ端から病院送りにするといふこともあった。

絹人がここまで優奈を溺愛、いや過保護に接するのは昔のとおる事件がきっかけだった。

過去に縛られれば、未来を失う

数年前。

絹人がまだ中学生になりたての頃。

優奈の面倒を見ている時だった。

「ほらほら！ 優奈っ、パスッ！」

住んでいるマンションの近くの公園で、いつものようになんら変わりなくボールで遊んでいた。天気も快晴で、良いことが起こるんじゃないかと思える日。

優奈は絹人の蹴ったボールを追いかけて、道路に飛び出す。

「お兄ちゃん！ 取ったよ！」

道路の真ん中を横断しようとするボールに抱きつき、両手で掲げて絹人に見せる。

絹人は手を振り、パスの合図をした時だった。

視界の隅に、優奈へと近づくトラックを見つけたのである。

トラックの運転手は気づいてもいないのか、勢いは衰えずに走ってくる。

「優奈！！！」

叫ぶ。

だが、優奈はキョトンとした表情のまま立ち止まった。

「優奈ああああああああ！！！」

絹人は走り出す。

トラックがもうそこまで迫ってきている。

やけに長く感じる道。全てがスロー再生されているかのように動きが鈍くなる。

ようやくたどり着いた。優奈の肩を掴み、押し出す。

（やった。助かった）

絹人は安堵し、ため息をつこうとする。

絹人の体に耐えきれないほどの質量が激突した。

……。

気づけば白一面の世界が広がっていた。それが天井と分かるまでに少しの頭の整理がかかった。

目を覚ましたばかりで視界がぼやけたままだった。はっきりとさせるために手の甲でこすろうとする。

（あれ……）

動かない。

手が動かせないのだ。

いや、手どころか腰や足、指の先まで神経が通っていないようにピクリとも動いてくれない。植物人間ってこんな感じなのかな、と絹人は変に冷静な考えを浮かべる。

音が少しずつ大きくなってくる。今まで耳すら動いてなかったのか、音は鮮明になってきた。

「……いちゃん……おにいちゃん……」

誰かのすすり泣く声。妙に懐かしく感じる。

（へいへい、優奈か……この声……）

その泣き声に耳を傾ける。

「起きてよ……ねえ……うう……」

絹人の腕に小さな手が添えられた。

「お願いだよ……お兄ちゃん……」

妹の問いかけに答えるべく、口をもぞもぞと動かす。

「ゆ……な……」

「お兄ちゃん!？」

優奈の目からは涙が止まり、次に大きく見開かれていた。

「ゆっ……な……」

「お兄ちゃん……お兄ちゃあああああん!!」

首に腕が回され、抱きつかれる。

「良かった……良かったよお……」

暖かい涙が頬を伝う。

(まだ生きてるのか……俺……)

懐かしい感覚が徐々に戻ってきた。

優奈の腕の感触。優奈の声の心地よさ。優奈の涙の暖かさ。

どれも失いたくないものだった。

「ごめんね……お兄ちゃん……ごめんね……」

ごめんね、その意味は絹人はよく知っている。

優奈の代わりに絹人がトラックに轢かれたこと。

(おいおい、なんで謝るんだよ……もともとは俺が悪かったんじゃないか……。俺があんなところに蹴らなきゃ、優奈は悲しまなかったはずなのに……)

これほどまで大きな衝撃を与えたことに、トラックに轢かれたこと以上の痛みを覚えた。心の傷はそう簡単に癒えやしない。記憶が何もかも掘り起こしてしまう。

自分の不甲斐なさを呪うと同時に、自分がこれからどうなるのかを考えてしまう。このまま動けなかったら優奈はどうなってしまうのか。

真っ白な天井をぼんやりと見つめる。

「絹人君、目を覚ましましたか」

ふいに男の声がした。

天井を見つめていた神経が全てその言葉を聞き分けるために向けられる。

「あ、昨日のおじさん……」

「優奈ちゃんか。お兄さんが起きて良かったね」

「うん！」

なにやら内輪で話が進められているようだ。

知らないところで勝手に自分の話をされるのはやや癢しゃへだが、ここ

はひとまず参加した方がいだろうと口を開く。

「あ……ぐ……い……」

思っていた以上に舌が回らない。

どうやって意思疎通をすればいいのか、小一時間考えても分からないだろう。

その様子に気づいたのか、男の顔が絹人を覗き込んだ。

「これは災難でしたね。運動障害ならまだ助かる余地がありました
が、その上、運動の記憶がごっそり無くなっているらしいじゃない
ですか」

運動障害？ 運動の記憶？

「おっと、起きたばかりで分かりやすいですね。ざっと略すと、あ
なたは赤ん坊以上の力を二度と出すことは出来ないのです」

体中の毛が逆立つような悪寒に襲われた。

「ほ、本当なんですかあ！？」

優奈が声を張り上げる。

「本当だよ。立つことはおろか、喋ることもままならない。なんと
か内蔵などの器官は動いてくれてるけど、餓死の道は避けられない
ね」

「そ、そんなあ……」

優奈の声が尻すばみしていく。

「お兄ちゃん……」

「ただ、一つだけ方法があります」

「方法……？」

「そうです。脳の代わりの役割を果たす新製品があるんですが……
少々お値段の方が」

急に深夜のテレフォンショッピングのノリになったのを聞き、不
安が込み上げる。こういうタイプのセールスなどには散々騙されて
きたのだ。

「三百万ですね」

「へへ三百万」

優奈は頭の中で軽く三百万を想像した。

「三百万!？」

そして叫んだ。

「そうです」

「そんなお金……うちには無いです……」

「そうですか……。でもね、タダ働きをしてくれるのなら、無償で提供いたします」

「あう？」

優奈は言った意味が分からず、小首を傾げる程度だった。

「つまり……それを付けたままお仕事してくれるだけで、それをお譲りします、ということですよ」

「なるほど」

「どうします？ お兄さんの方は……って喋れる状態でもないか」
悪いか。

「じゃあ、二人でお話があるので優奈ちゃんは外で待っていてください」
い

「はい」

素直に言うことを聞き、優奈は走って出て行く。足音が遠のくの
を寂しく思ってしまう。

（さて、本題です）

おっさんの声が脳内に入り込んできた。

（おいおい、ついに頭までおかしくなったのか、俺……）

（テレパシーですよ!）

（へいへい、なんだ、テレパシーか。大人のあんたが、なんで超能力を持つてるのが分からないが、話を聞いてみる）

（それは助かりました。こちらも教えるつもりは毛頭ありませんので。本題に戻りますね。その機械には演算補正のプログラムも入れています）

（やいやい、そりゃなんだ）

（仕事とあなたを繋ぐ鎖、ですかね）

（繋ぐ？）

（とりあえず、仕事をするかどうかを考えてください）

（する）

（そ、即答ですか）

（当たり前だ。これ以上、自分のせいで優奈が傷つくのは嫌だ）

（そうですか。ならば上層部にはそう伝えておきますね）

（勝手にしろ）

（初日からギブアップしないことを祈ります）

おっさんはそれだけ言い残し、去っていった。

（……ったく）

絹人はぼやけた天井を見つめつつ、

（もう二度とあんな目には合わせない）

絹人は心で呟く。

（優奈を守ろう）

絹人の決意をあざ笑うように、暗部の仕事は非道な物へとなりつつあった。

大切な物――三日月の起床（前書き）

とりあえず、暗部編は終了ですかね

大切な物――三日目の起床

今から二年前。

英国に、地図に記載されない隠れた病棟があった。

外観は壁一面に魔法陣のような物が彫られている。これは人避ける魔術の一つであり、ここが地図に記載されない由縁でもある。辺りには人どころか野良猫の一匹もない。まるで時が止まったように動く物は無いのだ。

止まった空間を乱すように一つの白い影がある。

それは真っ直ぐに病棟へと向かい、中に入った。

外装とは違い、内装は簡素なものだった。白一面に道を示すための黄色いタイル。壁には手すりが付いてある。

白い影、いや白いローブを身に纏った少年は一番奥の部屋に真っ直ぐに入った。

その部屋は個室で窓とベッドがある。そのベッドには女の子が寝ていた。

「セラ……」

白いローブの少年は呟く。それはベッドに横たわったまま目を覚まさない女の子に向けられた物だった。

「やっと戻ってこれたみたいだな」

少年の後ろに、少年と同じ歳ぐらいの女の子が立っていた。

名前はレイヴィニア・バードウェイ。金髪碧眼で、服も少年に被せるように白一色。唯一ソックスのみが黒という異色を放っていた。少年は笑いを含んだ声で言う。

「また一年経ってしまったよ」

どこか諦めのように感じる切なげな声にバードウェイは眉を下げる。

「肩を落とす必要は無い。まだ若いんだ。チャンスなんて何度となくやってくるだろう」

「本気で言っているのかい？」

少年の皮肉めいたセリフにバードウェイは黙り込む。
少年も口を閉ざし、静寂が訪れた。

耐えきれなくなり、バードウェイは口を開く。

「経過壊し。お前にも理解は出来ているのだろう？」

経過壊し、黒服の少年の記憶を奪った能力者。

それがこの白いローブの少年である。

「分かってるさ」

経過壊しは唇を噛みながら話す。

「私には、『魔法名』を持つ資格どころか、たった一人の女の子を助ける力も無いことをね」

「まだ引きずっているのか？　いつまで偽りの魔法名を名乗り続ける？　意味も持たず、ただ読める程度でしか無い魔法名を」

「g u r k o p 2 6 7 …… 死を賭して救う……か。意味すら持たない魔法名に大層な文句を付け加えただけの下らない物だ」

「ラテン語としての意味は無いのだからな」

「いつからだ。俺が魔法名を捨てたのは」

「禁書目録を救えなかった時から、とお前から聞いたが？」

「そんなに昔だったか」

「そのローブが何よりの証拠だろう」

そう言っただけでバードウェイは自分の襟首の布を引っ張る。

「そろそろローブを新しいのに替えたらどうだ」

「断る」

経過壊しは即答した。

「これはセラが作ってくれた物だ。捨てるなんてことは絶対に出来ない」

「ガキだな。過去にすぎるな。そのセラを救うために過去を捨てる。お前の魔術は過去を打ち消す物だろう？」

「そう簡単に捨てられるほど人間は出来てやしないさ」

皮肉気味に言った経過壊しに、バードウェイも目くじらを立てる。

「あのなあ……確かに前回の『セイントキラー聖神殺し』は未完成で、千人分の怨念を一年で集めなくちゃならないっていう糞性能だがな、過去は捨てていけ。まだ若いだろう？」

「若い若いって……大人になって『妹』が目を覚ました時、私はどんな顔すりゃいいんだ」

「笑えばいいんじゃないか。そして言ってやればいい。寝坊だぞ、ってな」

バードウェイはしみりとしたムードを消すように笑ってみせた。

「焦るなよ。あと、怨念を集めたいなら格好の場所がある」

「なに？」

「学園都市、というところなんだがな」

……。

病院の景色は見飽きた。

そして唐突に現代へ戻る。

勇里が三日目の朝を迎えたと同時に最初に浮かんだ言葉がそれだった。

三日間も同じ景色を見せられれば飽きるのも頷けるだろう。しかも、三食のご飯は抜きで点滴のみ。腹も『飯食わせろ！飯食わせろ！』と絶賛アピール中である。

痩せたんじゃない？ と見舞いに来てくれたクラスメートにも言われた。確かに体重は落ちたし、以前よりもスリムになったかも知れない。だからって、

何も胸の肉まで落ちなくてもいいじゃないか。

体重や脂肪に律儀にも比例してくれた胸に嘆きの視線を向ける。
服の上からでも分かる地平線にため息しか出ない。

勇里の部屋は個室ではなく、二人用になっている。
横に並ぶようにベッドが二つ置かれ、片方に勇里、もう片方に穂波が寝ている。

勇里は穂波の胸に視線を向けた。

豊満と言っても過言どころかまだ表現が足りないと思える大きさに息を呑む。いったい何を食べたらこれだけ大きくなるのだろう、と考えるが少なくとも常盤台に入ってからと同じ物しか食べてないはずだ。

そつと穂波に近寄り、胸をわし掴む。

「で、でけえ」

そして揉む。

大きさが指を伝わってくる。

苛立ちが絶頂を迎えようとしている時に大きな胸が揺れた。
いや、揺れたというよりも胸の持ち主が身じろぎしたのだ。

「ひゃうう……勇里ちゃん……？」

「あ、あええつ、穂波おはよう」

目を覚ました穂波に無理のある作り笑いを浮かべる。

（危ない危ない。私までレズな女の子と勘違いされるところだった）
勇里は穂波から背を向けてため息をつく。

後ろでは穂波が目をごすりつつも上半身を起き上がらせていた。

「勇里ちゃん。今日、退院だよね」

「うん、そうだよ？」

「寂しいです……。一緒にお泊まりなのに」
と言いつつ穂波が顔を赤くした。

レズ宣言をしてから、やけに積極的な気がする。

「穂波い、見舞いくらいには来るよ」

「むづ……。なら、我慢します」

何を我慢するのか。それを問い詰めるには勇里には勇気が足りない

か
っ
た。
。

大切な物――三日目の起床（後書き）

バードウェイの喋り方ってだいたいこんな感じでしたかね

新入り（前書き）

書こう書こうと思ってたら二週間以上経ってました

新入り

学園都市は相変わらず賑やかだった。

店がところ狭しと並んでいる大通りを歩く勇里の耳には、皆の笑い声が聞こえる。

この日だけは密かに買い揃えていた私服を着ていた。ひらひらのスカートに、ワンピースを上着にしただけのような薄い物など。

「あー、休暇かぁ……」

退院したばかりということ、風紀委員の仕事を一日だけ休ませてもらえることになっている。

それはとてもありがたいことなのだが、三日間も寝転んでいたから体が疼いて仕方がない。散歩でもしていなければ、むず痒くなりそうだった。

「でも、一日休みなんて逆に何をすればいいのよ」

勇里は風紀委員の仕事ぐらいいしか打ち込んできた物はないので、やりたいことなど一つも無かった。

太陽が勇里の神経を逆撫でしそうになるほど照りつける。

イライラが最高潮に達したあたりで、後ろから、まるでカエルが飛んだような拍子抜けた声がした。

「その君」

もしかして自分のことか？ と勇里はチラッと声のした方向を見た。そこには三人ほどの男がヘラヘラ笑い、そのうちの一人が手を振っていた。

本当に自分かどうか確かめため、視線を一度前に戻す。しかし、前にあるのは曲がり角だけで人はいない。

もう一度三人組に顔を向け、自分の顔に人差し指を向けた。

ヘラヘラと笑いながら頷いた三人に勇里は向き直る。

「何かご用ですか？」

あ、と口を押さえた。そういえば休暇中だった。

いつもの仕事に使う口調で話したことに戸惑う勇里に気づかず、三人組のうちの手を振っていた男が返事をする。

「いやあ、君可愛いね。お兄さんとどっか遊びに行かない？」

あー、ナンパか。

先人が使い古したような常とう句を並べた言葉のおかげで冷静になれた。

「ね、いいでしょ？」

さっきとは違う男も話しかけてきた。

（あー、もう面倒くさい……）

勇里の神経を逆撫でしたのは太陽ではなく、この男たちのようだ。眉間にシワを寄せて、諭すように話す。

「お断りします。私は忙しいので」

これで諦めてくれるだろう、と勇里は安心した。

しかし、返ってきた返事はその意を反する物だった。

「いいじゃん。君、暇そうにしてたし」

とヘラヘラ笑いながら手を引っ張ってきた。さすがにこれは予想外だったのか、「あわわわ」と勇里は目を回す。

（とにかく、ここは離れてもらわないと）

腕を捕まれた時点で気づく必要があったと思う。勇里の能力は『アウトレージョン精神奪取』だ。やる気や、意識すら無くす能力。それを使いさえすれば一発で解決したはずなのだが、頭の中が急速に空回りしていて気づかない。

手を振り払おうと自分の腕を引っ張り返す。しかし相手はそれ以上の力で掴んでくるためどうにもならない。

「は、離してください！」

「えー、いいじゃないじゃん。いいとこ連れてってあげるからさあ」

「止めたらどうだ」

ふと、後ろから第三者の声が聞こえた。一瞬、まだ声を発していない三人組の一人かと思っただが、全員が全員勇里の後ろを見ていた。

勇里も釣られて後ろを見る。

「中学生をナンパとかロリコンかよ」

そこには、こんな暑い中なのに黒いパーカーを羽織り、フードを深く被った勇里ぐらいの身長の間人が立っていた。声からして男の子なのは分かった。

勇里の腕を掴んだ男が叫ぶ。

「関係ねーだろ！ 黙ってるクソガキ！」

「よりにもよって風紀委員をナンパしてんだもんなあ」

黒いパーカーの少年は言葉を完全に無視し、唯一見える口元から笑みを浮かべつつ話した。

三人組が呆然とした顔のまま数秒固まっていたが、少しずつ勇里に顔を向ける。間違いであって欲しいと願う顔が変に面白くて勇里は吹き出しそうになった。

不敵な笑みを浮かべ、言い放った。

「アウトバターン行動奪取。名前ぐらいは聞いてますね？」

「お、おいマジかよ」

男が腕を離すより先に勇里は能力を使う。

『動こうとするやる気を無くさせる』

男はまるで全身の力が一瞬で抜けたように崩れ落ちた。他の二人は一歩後ずさる。

「ふう、最初からこうしとけば良かった」

両手の平をパンパンとはたき、深呼吸をする。

そう、この感覚だ。

いつもの調子がようやく戻ってきた。アドレナリンのような物が出てるのか勇里は少しばかり興奮状態だ。

他の二人が敵意を剥き出しにした顔で勇里を見る。

「下手に出てたらつけあがりやがって……！」

「風紀委員だろうが知らねえよ！ 俺たちを楽しませる道具になりやがれ……！」

「まるで小悪党の捨てセリフみたい」

鼻で笑い飛ばす。

一人が殴りかかってきた。大きく振りがぶる辺り、喧嘩も初心者というところだろう。しかし当たればかなり痛いのは確かめる必要も無い。

上半身を軽くずらす程度で避ける。そして、腰に右拳を持つてくる。

「遅いつ！」

拳は突き上げるように放つ。

初歩的な戦いの技術だ。振りがぶつても威力は大したことは無いし、動作も大きくなって避けるのも容易い。

対して勇里の拳は出も早く、威力もそこそこで使い勝手の良いものだった。それに能力のおかげで威力を考える必要はない。

「ぐっ……！」

みそおち

鳩尾に当たった拳を引き戻す。男は呻き声をあげて、そのまま地に伏せた。

「デメエー！」

残った一人の男が更に殴りかかる。

（コイツも楽勝ね）

余裕を持って腰を捻る。そこで、脇腹に激痛が走った。

「痛ッ……」

まだあの太男にやられたキズは完治していなかったのだ。

痛みに気を取られた隙に相手はすぐ近くまで迫っていた。避けられない。

直感で判断した勇里は両腕を頭の上でクロスさせ、防御しようとする。

……。

何秒経っただろうか。

一向に訪れるはずの痛みは来ない。

恐る恐る相手の方を見ると、立ち止まっていた。

「えっ？」

両腕を頭の上から下ろし、状況を確認しようと辺りを見回す。

相手の男は白目を向いたまま固まっていた。そして、一回ぐらりと揺らいだと思うとそのまま倒れ込んだ。

「な、なに？ なんなの？」

妙な冷や汗がする中、後ろから大きな笑い声が聞こえた。

「はあ。いやあ、すごいね。さすが行動奪取の片割れ。行動制限がいなくても支障無しってことか、そうかそうか」

黒いパーカーの少年が大きな声で言った。

「まさか、あなたが？」

この少年が目の前を倒したんだろうか。

「そうだ。もともと、そいつらにはあらかじめ、酸素の吸引能力を一時的に無くすウイルスを吸わせていた」

「ウイルス？」

黒いパーカーの少年は、深く被ったフードを脱いだ。その顔は頬に一筋のキズが深く刻まれていた。髪はボサボサだった。

「俺の名前は音無 おとなし さくや 昨夜」

「昨夜って、女の子の名前みたいね」

「それは言っなよ。まあ、これから世話になるんだから挨拶ぐらいしてもいいだろ」

「世話？」

昨夜は勇里に手を差し出した。そして、口の端を上げつつ言った。

「風紀委員の新人りだ。よろしく、『先輩』」

問題は同じところからやってくる(前書き)

少し遅れました

問題は向こうからやってくる

不良たちを退けた勇里は、涼むついでに風紀委員の後輩と名乗る昨夜を連れて喫茶店に入った。

「昨夜、だっけ？ 風紀委員なのに、なんで腕章が着いてないのよ」
二人はテーブルを挟んで座っていた。目の前でブラックコーヒーを飲む昨夜に勇里は奇異の目を向けた。

昨夜はコーヒーを半分ほど飲み、ようやく口を開く。

「家に忘れた」

「はあ。んで、制服は？」

「私服で行ける学校だからな。寒がりな俺にはこれぐらいがちょうどいい」

夏場でもその厚着は、なにかしらの病気じゃないか？ 勇里は更に訝しげに見つめる。

「おい、あんま眉ひそめんな。尋問されてるみたいで気分が悪い」

「仕方ないじゃない。風紀委員にしてはだらしないし」

「パトロール中でも胸元のボタン開けてるお嬢様には言われたくないね。第一ボタンまで止めなさい！」

「うちの先生みたいなこと言っな！」

横からウェイトレスがオレンジジュースが並々と注がれたコップをトレイに乗せて持ってきた。勇里はそれを奪うように取り、ストローを突き刺して飲み干す。すぐにジュースは無くなり、吸い込む音だけが鳴る。氷がからんと転がった。

ジュースを飲み干した勇里に対し、昨夜はまだブラックコーヒーを残している。

勇里はストローを口から離れた。

「おっそい」

「不機嫌っすね先輩」

「その先輩っての、やめなさい」

「はい、先輩」

「やめろって言ってるんでしょ!？」

大声をあげた直後、周りの視線が突き刺さるのを感じ、意気消沈のまま空のコップに入っているストローを吸う。

「行動奪取さんよ、最近、白いローブの男を見なかったか？」

「白い……ローブの男？」

「その様子だと見てないらしいな。もしかしたら、あんたの前に現れるかもしれねえ」

「どうということよ？」

勇里は眉間にシワを寄せる。

やっとコーヒーを飲み干した昨夜は話を続ける。

「そいつが戦いを挑んでくるかも」

「はあ？ なにそれ」

「すまないな。俺が吹き込んだせいだと思う」

「ちよつと話が見えない」

「まあ聞け。そいつは記憶を奪うんだ」

「記憶を操作する能力者、学園都市でも何人か……」

「記憶を奪えるほど高能力な奴なんて限られてんだろ」

「そんなの……超能力者^{レベル5}くらいなもの……」

「そう。その超能力者の中に、常盤台の二本柱の一つ、記憶操作の能力を持つ第五位がいる。あの目がキラキラのお嬢様、いや王女様かな？」

例えば方を王女様に変えた理由は、以前昨夜は第五位を見かけた時に、周りの生徒が第五位に、まるで召使いのように付き従っていたからだ。

勇里は目を細める。

「常盤台は女子校よ？ 男がいるわけじゃない。それに第五位は女の子だし」

「そつだな。女の子だしな……」

昨夜はふいに目線を下げた。

「そついや、常盤台って胸がデカい奴多いよな」

「なっ!？」

明らかに昨夜の目は勇里の胸に言っている。

「どこ見てんのよ!!」

勇里は声を荒げた。

しかし、昨夜はまるで反省していないように、テーブルにひじをつく。

「紙やすりで削ったようなツルペタ野郎なんか、セクハラに入るもんか」

勇里の拳が昨夜の顔面に入った。

……。

「ひきなりヒドいっふせんふあい」

頬に絆創膏を貼られた昨夜は、舌つたらずのような口調で勇里に文句を言った。

「悪いのはソツチよ、変態」

殴った本人はと言うと、顔を赤らめながら腕を組み、そっぽを向いてしまっていた。

「顔面殴った次は十字固めとか殺す気っすか。案の定ぺったんこだったし」

「うつさい。これ以上生傷増やしたくないなら私を怒らせないで」

「おー怖い。せつかく俺が不良たちから助けたつてのに」

「あれぐらい一人で楽勝だったわよ」

強がってはいるが、昨夜がいなければ無傷ではなかったのも事実だ。

「……楽勝だったけど、ありがと」

更に顔を赤くしながら呟いた。

「素直じゃないねえ。もつと誠意を込めて。そうだ、今度はメイド服で」

勇里の拳が昨夜の鳩尾に入った。

「ぐえっ！！　じ、じゃあ……チアガール」

次は脇腹に蹴りが入る。

「ぐはっ！！　な、ならバニ……ナースで」

「今バニーガールって言おうとしたけど止めたでしょ！？　胸見て止めたわね！？」

「いや……ぺったんこのバニーガールとかマジ誰が得するん」
大外狩りからの十字固めが決まり、昨夜はとうとう諦めた。

……。

勇里は学生寮に戻ってきていた。

「ほんと、今日は疲れた……」

着替えもせずベッドに寝転ぶ。

「なにが起こってんのよ……」

多重能力者と思われる摩擦無視。勇里たちを入院させた大男。表の常識は通用しないと云っていた。

次は風紀委員の後輩。そいつが運んできた問題。記憶を奪う能力者。

最近は事件が多すぎだと思った。勇里が寝ている間に、レベルアップ幻想御手なんていう物が騒がれていたたり。

「学園都市に治安なんて言葉、似合わないわね……」

そこかしこで小さな事件は起きている。例えば、能力者が自分の力を使って暴れたり、スキルアウト無能力者集団が能力者を襲ったり。やりたい放題である。

風紀委員なんて治安を守るなどと言いつつ、そういう表に出ない

事件まで扱えないのだ。もちろん、パトロール中に見つければ補導するが、事件なんて一目につかない所で起きているのが当たり前なのだ。着いた頃には事後だった、なんてザラ。

「寝ている場合じゃないよね」

勇里はベッドから起き上がり、制服に着替える。やはり胸元のボタンは二つとも開けている。

腕に腕章を通し、扉を開けた。

「一人でもやれる」

一人だとしても

「休んでなくていいの？」

風紀委員の支部に戻った矢先、勇里は峰合に心配されていた。

最新鋭の医術により、大怪我から早期復帰することが出来た勇里だが、やはり退院一日目から仕事に出るのは危険だ。やっと癒えたキズの口が開かれても困る。

心配している峰合に対し、勇里は胸を張って答える。

「あたしは風紀委員です。^{ジャッジメント}これしきでへばってちゃあ穂波に笑われちゃいます」

その力強い言葉に十二分の頼もしさはこもっていた。
安心した峰合は笑顔を浮かべる。

「そう。でも、無理はしないでね」

「ふふ。いつも人に仕事押し付けるくせに、今日はやけに扱いが良いですね」

「私だって、怪我人への対応ぐらい心得てるわよ」

「いつもは口うるさいお母さんみたいなのに。そうだ、峰合先輩がいつも言ってる説教句を言ってみてくださいよ」

「いいけど。えっと、風紀委員は学園都市の治安を守る。それを掲げているのは我らであって、緩慢程度理由でおろそかにするのはこれ以上ない罪である」

「それですよ。たかがこれぐらいのキズ、緩慢にもなりませんよ」

「いつもサボってる奴のセリフとは思えないわね」

その言葉に勇里は吹き出し、続いて峰合も笑いだした。

「勇里、事件があっても無茶はしないでね」

「分かってますよ」

へらへらと笑ってはいるが、それでも大真面目である。

「んじゃ、行ってきます！」

勇里は支部を飛び出した。

……。

「学園都市……か」

白いローブの男。経過壊しである。

彼は高層ビルの立ち並ぶ路地の中心でぼそりと呟いた。

空を見上げてビルが見える。まるで閉鎖された世界のような。

「また……ここに戻ってきてしまったな」

そして、聖神殺しに必要な紙を取り出した。この紙には英単語が
たくさんと並べられているが、きちんとした英文になっていない。
日本語で例えるなら「今日、行った、デパート、二時」のように主
語や述語、現在形や過去形が法則に従わずに書かれている。

この聖神殺しについて説明しておく。

これは怨念をかけられた相手の魔力を通じて相手を殺すという物
だ。つまり、殺したい相手を複数から嫌わせることが出来れば必ず
死ぬというもの。

なら、なぜセラに、そしてなぜ呪いを殺せるのか。

ある魔術によって経過壊しとセラは魔力が繋がっている。そして、
人の施せる呪いは魔力を通じる物が多い。つまり、魔力を通じる呪
いを、その呪いで殺せるのではないかということだ。

「呪いを指名しても殺せなかった。じゃあ、なにがセラを苦しめて
いる？」

幾度となく解除の方法を試したが失敗。その末に聖神殺しを使っ
ているのだ。

そして、経過壊しは一度聖神殺しに成功している。それは音無昨
夜の記憶を奪った年、去年のことだ。

しかし、呪いを殺すことを命じたがセラは目を覚まさない。

「確実に成功している。千人分の記憶を奪い、全員に顔まで覚えさせたんだ」

記憶を無くした時に犯人と言って顔を見せる。もともと無いところに衝撃の強い物を詰め込めば、少なくともキズは残る。それが怨念として繋いでいるはずだ。よほどの鳥頭じゃない限り忘れはしないだろう。

「だが、呪いは消えなかった。なら、苦しめているのは呪いではない？」

という結論に至る。

「考えている時間は無いな。後、43人で成功だ」

経過壊しはひとしきり独り言を呟いたあと、人ごみに消えていった。

……。

音無昨夜は学生寮兼マンションにある自分の家に帰り、ベッドに寝転がっていた。

学生寮兼マンションということで、やはり学生以外も居座っている。

「昨夜ちゃん。元気い？」

ベランダから男の軽い声が聞こえてきた。

昨夜は不機嫌げみに返す。

「その“ちゃん”っていうの止める。俺は男だ」

「ああスマンスマン。いやあ、今日は久々のボーナスで浮かれてしまっただけ」

ふとベランダを見ると、隣の部屋とを区切る柵を越えてくるおっさんがいた。

名前は桐生明石。きじゅう あかし 左隣に住んでいるおっさんだ。どこの会社の人間でもない得体の知らない研究者、と昨夜は記憶に残している。顎に剃った短い髭を生やし、へらへらと笑っていた。服もアロハシャツをポップにしようと頑張ったが失敗したような安っぽい服を着ている。

なんのためらいもなく桐生は昨夜の部屋にずかずかと上がり込んできた。

「なんと！ 今日のうちの晩飯はすき焼きです！」

「マジで！？ くそお、いいな」

「昨夜にも食わせてやるぞ！」

「いいのか！？」

「いいともいいとも！ オレってば、今日は木原を悔しがらせちゃってさあ。ボーナスもあるけど、それ以上にこっちの方が嬉しいね」

「木原ってアンタの同僚だっけ？」

「口の減らない嫌みな奴だよ。ま、あんな奴の話題はナシにして、すき焼きパーティーと行きますか！」

「いいねいいねえ！」

いつもクールぶる昨夜もすき焼きパーティーと聞いてよだれを垂らさんばかりの興奮ぶりである。

その騒ぎを聞きつけた男がもう一人声をあげる。

「すき焼きですとおおおおお！！？」

右隣の林川礼太だ。はやしがわ れいた ベランダの柵を軽々と飛び越え、昨夜の部屋へと滑り込んできた。

「げっ、もう一人か……」

桐生が露骨に嫌そうな顔をした。

「おいおい！ 昨夜ばかりズルいぞ！！」

礼太は昨夜の肩を掴み、唾を飛ばしながら叫ぶ。唾を袖で拭い、礼太の顔面を殴り飛ばす。

「うるさい。すき焼きは俺と桐生さんのものだ！」

「テメエ！！ 親友にすき焼きもくれないほど非情な奴なのか！？」

親友、という言葉に昨夜はいつも違和感を感じる。記憶を無くしている昨夜にとって、礼太との思い出は皆無だ。

だが、礼太はその事実を知っても昨夜と親友であろうとしている。『記憶喪失がどうした！ 親友つてのは記憶じゃねえ、心で繋がってんだよ！』という礼太の声が耳から離れない。

昨夜にとって唯一の繋がりである。

「親友であろうと、晩飯は譲れないな」

「くそおお！！ いいよな、桐生さん！？」

昨夜が退かないなら桐生、と礼太はターゲットを変えた。桐生は驚きつつも首を縦に振る。

「礼太君も来ていいよ。どうせ、たくさん買ってあるし」

「はい交渉成立！！」

礼太の歓喜の声に負けじと昨夜も大声をあげる。

「肉は渡さねえぞ礼太！！」

「デメエこそ豆腐だけ食ってな！！」

こうして、桐生主催のすき焼き争奪戦パーティーは開催されたのであった。

一人だとしても（後書き）

礼太はいい奴

忘却

「うーん、出たはいいけどねえ」

支部から飛び出した勇里だったが、世間は平和そのもので手の届く事件は起こっていなかった。

退屈と言えば退屈だが、それが妙に心地よい。

「学園都市なんて事件ばかりなんだし、これぐらい平和、楽しんだっていいよね」

勇里が大きく背伸びをすると、どこからか女の子の悲鳴が聞こえた。

「えっ、まさか平和を満喫してる最中にさっそく事件!？」

せっかく平和を楽しんでいるのに、という怒りの感情を持ちつつ、いきなり舞い込んだ事件へと向かって走る。

「まったく、学園都市の辞書に治安の言葉は無いのかなあ」

……。

「はい、どうしましたか!？」

悲鳴が聞こえた場所、路地裏である。悪さをするならとても適した場所だろうが、幾度となく路地裏の事件を経験している勇里にとってはすでに『庭』のようでもある。

「おい、と声をあげて探していると暗闇の中に倒れている人影を発見。」

女生徒だ。服に乱れも無く、暴行を受けた跡も無い。なら、なぜこんなところで倒れているのだろう。

勇里は慌てて抱き起こす。

「どうしました?」

「……………どこ……………？」

女生徒はか細い声で言った。

「ここは住宅街近くの路地裏ですよ」

「路地裏……………？ 住宅街って……………？」

気絶させられてから連れてこられたのだろうか、いや、それではさっきの悲鳴と辻褃が合わない。

第三者の声が思考に割り込んだ。

「人払いのルーンを刻んだハズだが？」

抑揚の無い、枯れた声だった。

勇里は声のした方向を見る。そこには白いローブを着た背丈の高い男が立っていた。

勇里はローブの男をキツく睨みつける。

「アンタ……………どこの人間？」

職務質問のつもりだったが、返ってきた返答は斜め上の言葉だった。

「魔術サイドの人間さ」

「は？ 魔術？」

「そして、そちらの女の子の記憶を奪った犯人だ」

ローブの男は女生徒を指差す。すると、女生徒の顔はみるみる青ざめ、歯をカチカチと鳴らす。

「……………うそ……………思い出せない……………いや……………嫌……………！」

目の焦点が合わなくなり、眼球が小刻みに震えていた。

勇里は更にローブの男をキツく睨む。

「アンタ！ この子になにしたの！？」

「だから言っただじやないか。記憶を奪ったと」

「記憶操作の能力者？」

「能力者？ なんのことが分からないが、私は記憶を奪う力がある」
ローブの男はそれで言葉を止めず、饒舌に話し続ける。

「その女の子は二度と親も、友人も、大切な思い出さえも思い出することは出来ない」

「意味が分からないわよ！！ 魔術、記憶とか、何者なの！？」

「もう何度も言ってるじゃないか。魔術サイドで、記憶を奪う力を持つ。あとは、経過壊しという名の魔術を使う」

ローブの男の口から吐き出される言葉を、勇里はいっさい理解できていない。いや、理解できない。

なぜならその言葉は魔術だからだ。科学で固められ、それが日常と化した勇里には別次元の話。

色んな憶測が勇里の頭を飛び交っていた。

多重能力者。あるいは電波が入ってるのか。研究者の悪ふざけか。どれであっても、今は関係がない。

「あたしは風紀委員。あなたを拘束します」

「やっぱり風紀委員だったか。なら、行動奪取の二人は知っているか？」

「行動奪取の片割れ、精神奪取があたしよ」
「ほう」

経過壊しは興味深げに勇里は見つめる。

「音無昨夜、君は彼の推薦なんだ」

その名前で勇里の記憶は巻き戻る。

『そいつは記憶を奪うんだ』

「まさか……昨夜の言ってた記憶を奪う能力者……？」

「すでに話は聞いてるみたいだな。そして更に、未だに怨念は続いているらしい」

楽しそうに笑う経過壊しを見て、勇里の背中に悪寒が走る。

なんでこんなに楽しそうなのよ。

「音無昨夜か。記憶を奪われた恨みだと、どこまでも追ってきたがね」

「アイツの記憶まで奪ったの!？」

「そうだ。無差別的に学園都市の人間の記憶を奪っていたのだが、偶然にも面白い人間の記憶を奪えたものだ」

「なにが……なにがそんなに楽しいのよ？」

「残り18人なんだ」

声の音量が上がった。

「その18人から恨まれれば、それで終わり」

「なに言ってるの？」

「とある事情で一千人から恨まれなければならなくてね。だから記憶を奪ってる」

馬鹿げてる。

正常ではない思考と言動だが、簡単には折れなさそうなものが伝わってくる。

未だに力チカチと震える女の子をそつと地面に下ろし、勇里は経過壊しの前に立つ。

「許さないよ」

「二人じゃなくても大丈夫か？」

「アンタみたいな小物……一人で充分よ!!」

勇里は叫ぶと同時に走り出す。経過壊しは動かない。

そのまま手を伸ばし、能力を発動する。

『動こうとするやる気を無くさせる』。これで終わりよ。

「やはりダメだな」

経過壊しはそう呟くと、姿がどんどん薄れ、消えた。

勇里の腕は空を掠める。それと同時にサウナのような暑さが勇里の体を包んだ。

「消えた!？」

「砂漠では、高い温度のせいで遠くにある物が、まるで近くに見えることがある。それと同じだ」

後ろから声がした。

とっさに振り返り、バックテスップで距離を取る。

経過壊しは不敵に笑っていた。

「君も、私を恨んでくれるか？」

呟いた直後、経過壊しの腕が炎に包まれる。その炎は垂直に伸び、まるで一つの剣のようになっていた。

一気に気温が上昇する。はけ口の狭い路地裏では熱が回るだけだ。気温は見る見るうちに上昇していった。

勇里の頬を汗が伝う。

「発火能力？」

「炎剣……彼はそう呼称していたかな」

経過壊しはためらいなく炎剣をふりかぶる。勇里は回避の動作に入る。

これだけ大きな動きなら避けるぐらい簡単よ。

余裕を持って動いた。炎剣は空を燃やし、地面を焦がす。

「ハッ！ 遅い遅い！」

「拡散」

勇里が挑発の声をあげる中、経過壊しは呟いただけだった。

直後、炎剣がはじけ、熱風が吹き出した。

その勢いの強さは台風なんて軽い物ではなく、まるで竜巻の中心にいるような力強さだ。

耐える間もなく勇里は吹き飛ばされ、数メートル先の壁に叩きつけられる。

「ぐっ……！」

痛みをこらえ、目を開ける。

そこには、一瞬で勇里の前へと移動していた経過壊しが立っていた。

燃え上がる火は風により吹き荒れている。それを背にし、経過壊しは勇里の頭を掴む。

「な、なにを……！」

「全て忘れる」

心だけが知る記憶

暑い……。

あれ……、どうしてあたしは倒れてんだろ。

あれ？　なんでこんなところにいるの？

目を開いてみた。

焼け焦げた地面や壁の比較的新しい跡を見る限りだと、ここで火が上がったようだ。熱気の原因もこれで理解できる。

だが、今の状態はどう説明しよう。

誰かに話してみよう。友達はどうだろうか。

あれ？　友達……、あたしの友達。思い出せない。
なんで？

そもそも、あたしは誰なの？

視線を巡らせていると、視界の隅に白いローブを着た人間が見えた。

ソイツは口の端を釣り上げ、笑っている。

「ようやくお目覚めか」

声は男のようだ。

ローブの男はあたしの前で膝を折り、座った。

力無く見つめる。

呆然と眺めるだけしか出来ないあたしに、ローブの男は言った。

「君の記憶を奪ったのは私だ」

そう言い、かぶっていたフードを脱ぐ。

顔はひどくやつれており、尋常ではない疲労が見て取れた。

言うや否や、男の姿は徐々にぼやけていき、最後には消えてしまった。

事態を把握するためにとりあえず体を起こし、周囲を見回す。

「記憶……、あたしの記憶……？」

もう一度思い出そうとする。しかし、どれだけ粘っても思い出せ

ない。

ドンドンと怖くなっていく。自分が分からなくなる。精神までおかしくなりそうだった。

歯をカチカチと鳴らし、震える。その時に、ローブの男が言っていた言葉を思い出した。

君の記憶を奪ったのは私だ。

その言葉の意味をやつと理解した。

憎しみと不安が胸を圧迫する。

「ああ……うあ……」

嗚咽が漏れる。

一時、感情の振れ幅が限界を超えた。

そして、薄暗い路地裏に悲痛な絶叫が響いた。

……。

「すき焼きか……、そっぴや全然食つてねえなあ」

昨夜は今宵行われるすき焼きパーティーに瞳を輝かせ、腹を減らすために散歩していた。

いつもの街並みにこの良い天気だ。心地よさが何倍にも膨らんだ気がする。

「どうせ良い天気なんだし、ちよつと昼寝でもするかな」

昨夜が歩く道の先に公園が見える。よく昨夜が昼寝する場所だ。

公園に足を踏み入れた途端、歩みを止めた。

ブランコに勇里が座っている。常盤台の制服を着て、風紀委員の腕章を着けている辺り、無理して仕事しているのだろう。なぜかその服はススけてしまっている。

「おい、なにしてんだお前」

呼びかけるが反応が無い。

近づき、勇里の肩を叩く。

「無視はヒドいな。ま、先輩が仕事サボってるところを後輩に見られるのは恥ずか」

「あなたは、誰？」

「へ？」

勇里から抑揚の無い声がした。顔はこちらを向いてはいないが、昨夜に話しかけているのは分かった。

戸惑いつつも笑って話しかける。こういうジョークなんだろう。

「他人のフリしたって俺は騙されねえぞ？ 先輩」

「先輩？ じゃあ、あなたはあたしの後輩なの？」

「な、なにトンチンカンなこと言ってるんだお前」

そこでようやく勇里はこちらを向く。その目に光は無く、表情も今までの勇里とは思えないほど暗かった。

様子がおかしい。

「どうしたんだよ、お前……」

「なんかね、思い出せないの」

思い出せない。つまりは記憶喪失。

嫌な感覚が蘇る。あの時の不安感。

「おい、お前まさか……」

「何にも覚えてない。だから、あたしにはあなたが分からないの。ごめんね……」

消え入りそうなほどに尻すばみしていく声が昨夜の心を刺す。

昨夜は勇里の肩を掴み、叫ぶ。

「おい！！ その時、ローブを着た男がいなかったか！？ 何か言われなかったか！？ なあ！！ どうなん」

「痛いよ……」

その言葉で正気に戻る。いつの間にか勇里の肩を強く掴んでいたようだ。

「離して……痛い……」

涙目になりつつ視線を逸らす勇里に罪悪感が沸く。

「すまない……」

昨夜はおぼつかない足取りのまま、勇里の隣のブランコに座った。突然のことで頭が回らない。寮に着く寸前までバカ騒ぎしてた奴が、まるで別人のようにガラツと変わってしまった。

頬の絆創膏は先ほど勇里に付けてもらったものだ。体の痛みだってまだ癒えていない。そんなに時間は経っていない。軽傷すらも治っていない短時間の内に勇里はやられたのだ。

気が気で無くなる。自分から警告して、自分が守るなどと口走っておきながらコレだ。

情けない。

それに、穂波にはどう伝えよう。勇里の記憶が奪われたと言えば悲しむに決まっている。

更には狙われる可能性だってある。

「白いローブの男……」

勇里がふいに言った。昨夜はその言葉にすかさず反応し、勇里を見つめる。

「その男が、どうした？」

「記憶を奪ったのは私だ、って言ってきたの」
間違いない。経過壊しだ。

やはり標的にされたか、と昨夜は舌打ちをする。

「おい、気惹」

「気惹？　それがあたしの名前？」

「ああそつだ」

こうなったらやることは一つだけ。考えるまでもない。

昨夜は立ち上がり、公園の出口に向かって歩き出す。

「必ず記憶を取り戻してやる」

口から出た言葉は勇里に向けたつもりだったが、自分に言い聞かせる言葉にも感じられた。

一日だけしか会ったことの無い人間よりも、自分を感情が優先してしまうのだろう。

しかし、巻き込んだのは自分だ。

「そこで待ってる気惹」

「どうして？」

「もうお前がアイツと戦う必要はねえ。休んでろ。その間に俺が奪われた記憶を取り返してきてやる」

我ながらお節介だと思った。知り合い程度の人間にここまでしたことがあつただろうか。

もしかしたら、記憶を奪われたという連帯感が動かしてくれてるのかも知れない。

それ以上の会話を交わさず、昨夜は公園を出た。

……。

「あと、16人か」

経過壊しは、廃ビルの屋上で人の流れを見つめていた。

「これだけ少数ならすぐに終わるな。最後は派手にやるか」

そう言い、ロープのポケットからカードを取り出す。ルーンと呼ばれる物で、幅広い魔術に使える。

そのカードを投げ、ばらまく。カードは壁や床に吸い寄せられるように張り付いた。

「ようやく記憶を返せる……、いや、本当に返せるのか？」

聖神殺し。これは一年以内に千人分の怨念を集めなければならぬという手間のかかる大規模な呪い術式だ。その手間の代わりに効果は絶大で、たとえ相手が神であっても殺せる言われる。

だが、これはもともと安定の無い物で、失敗した時の代償が自分の死だった。経過壊しが死ねば魔力でつながっているセラも死んでしまう。

そこにアレンジを加えた結果、失敗しても術者は死なくなつた。

しかし、イギリス聖教でアレンジしてしまったせいで失敗した年の怨念が一つでも消えれば術式は消えてしまうという。

大層な物を素材に使っているため、簡単には作り直せない。消えてもらっては困るのだ。

「ったく……なにがセラを苦しめているんだ……」

苦しめているのは呪いではなかった。

まだ何かあるのだろうか。

「聖神殺しが完成したら、一度イギリス聖教に戻り、原因についてもう一度調べてもらうか」

などと独り言を呟いている間にルーンのカードが全て張り終わったようだ。

「よし、それじゃあ、行動を開始するでしょう」

心だけが知る記憶（後書き）

昨夜は、経過壊しは計画的に行っていると思っている。

しかし経過壊しは無差別に記憶を奪っているだけ。

運悪く経過壊しと勇里が会ってしまっただけです。

あと、昨夜は結構な馬鹿です。物事一つに集中すると前のこととかさっぱり忘れてしまうほど。

対決

経過壊しは、デパートやビルが建て並ぶ中の、人通りの多い交差点、その真ん中に立っていた。

人の波、波、波。数え切れないほどの数に圧倒される。それと同時に罪悪感が襲ってくる。

同じく、数え切れないほどの人を不幸にしてきたからだ。その人たちは全て、自分に対して敵意を抱いている。自然に呪いが発生する可能性がある、とレイヴィニア「バードウェイが忠告してきたが、いざとなれば魔力の通信を切って、自分だけが死ぬのでも良かった。いや、もし呪いが起こるならば、今すぐにも起きてほしい。散々、色々な人の罵倒や負の感情がこもった目で睨みつけられてきた。楽になりたい。

だが、その迷いは使命感が押さえ込む。唯一の肉親であるセラを守れなかった後悔。唯一の肉親ゆえ、頼れる人間が自分しかないというプレッシャー。

弱い人間なら、ここで心は間違いなく折れていた。

経過壊しも弱い人間の部類だ。

「セラ……」

ローブを襟を掴む。

このローブが心を補強してくれた。これだけが救いだっただ。

捨ててしまえば、気が気じゃなくなりそうだった。

「もうすぐ……目を覚まさせてやる。長い夢も、もう終わりだ」

一言一言、噛み締めるように呟く。

やがて決心がついたのか、深くため息を吐く。そして、経過壊しは一枚のカードを空中に放った。

カードは空中で制止すると、赤く輝き始める。

「イノケンティウス……」

十字路の真ん中で叫ぶ。

通り過ぎる人達が皆、こちらを見ようと首を動かす。それさえも断じて行わせない、と言い張るように炎は爆発し、広がっていく。悲鳴が耳を刺す。近くにいた何人かが吹き飛ばされたようだが、炎に巻きこまれた人間はいないようだった。

爆発した炎はやがて収縮していき、スライムのようにグニグニと四方八方に引き伸ばされ、すぐに人型へと変貌した。

直後、人型の頭が破裂した。

「ちつ。やっぱり未完成だったか」

頭は即座に元に戻った。

ラグ・イノケンティウス

未完成の十字架。とある魔術師の魔術を見よう見真似で再現した程度の力。威力は申し分ないが、やはり本物には遠く及ばない。

イノケンティウスはどこから取り出した炎で出来た十字架を持ち上げ、振り下ろした。

地面がえぐれ、鉄を熱したと同じように赤く変色する。

経過壊しはどこまでも聞こえるように、大きく叫んだ。

「今から貴様らをぶつ殺してやる!!」

収まりつつあった悲鳴は、今までは比べ物にならないほどの大音量と化し、たちまち大パニックを起こす。

必死で逃げようとする者が、同じ逃げようとする者を押しのけ、逃げる。そこに負の感情が生まれ、間接的に経過壊しへと届く。

「さあ逃げろ!! 殺してやるから逃げて逃げて逃げ回れ!!」

非情になる度に胸が苦しくなった。

イノケンティウスは被害の出ないギリギリのラインを攻撃している。

「ほおらほら!! 死にてえか!? あア!?!」

苦しい。

逃げる人ごみをかき分け、スーツを羽織った男女が、一定の距離を保ちつつ、銃口を向ける。

『大人しくするじゃん!!』

女がメガホンを通して声をあげた。

「誰がするかよ!!」

イノケンティウスの十字架が降り降ろされた。爆風が起こり、男女もろとも吹き飛ばされる。

ただ天を仰いで笑った。

声の出る限り笑った。

「おい」

これだけの雑音の中、その声はとてもよく聞こえた。

「ようやく見つけたぜ」

怪訝に思い、後ろを振り向く。

「三度目の正直だ」

黒いパーカーを着て、傷だらけのジーンズを履いた少年がいた。

「テメエ殴って思い出してやる。全て」

音無昨夜。

唯一の、経過壊しが認める“^{ライバル}手を焼く馬鹿”だ。

……。

音無昨夜は交差点に立っていた。

炎が吹き荒れ、地面はえぐれ、人の悲鳴がそこら中から聞こえる中、

ソイツはいた。

ずっと探し続けてきた“最も憎き宿敵^{ライバル}”。

振り向いた彼の顔は、疲労しきった弱々しい人間の顔だった。

それでも昨夜は拳に力を込める。

「派手にやってんな」

「ここで君の登場か。予想外だったよ」

そう言いつつも、経過壊しは鼻で笑っていた。コイツは間違いなく、俺が来るのを知っていた。

いや、呼び出された。

わざわざ戦うためのステージを作ったということか。

声に力がこもる。

「予想外、か。俺からすりゃあ、テメエがこんなド派手にやらかったことの方がもつと予想外だ」

「もうこれで最後だ」

経過壊しの口から引つかかる言葉が飛び出した。

「最後……どういことだ？」

「言葉のままさ。これでこの茶番はおしまい。記憶もちゃんと返す」
その言葉は、昨夜の足を退かせるのに足りる言葉だった。なんとか踏ん張る。

「信じる、っていうのが無理なんだよ！」

パーカーから黒い霧が吹き出す。それは一瞬で二人の周りを黒く染めていった。もう警備員の姿は見えはしない。

辛うじて見える経過壊しの行動に目をこらす。

放った霧は、人間の脳の回転速度をあげるウィルスである。これにより、もともとレベル2程度の昨夜が、レベル4の能力が使えるようになる。

更に、このウィルスは昨夜だけに適合するよう調節されている。

いわば、ここは昨夜の独壇場。

散らばったウィルス进行操作すれば、新たに違うウィルスも作れる。ここまでの危機的状況でありながら、経過壊しは余裕の表情を浮かべる。

昨夜が眉を顰^{ひそ}めたその時だった。

イノケンティウスは、十字架を空中に投げた。

視線を動かすまでもなく、十字架は爆発した。暴風が黒い霧をなぎ払う。

もちろん、黒い霧も跡形も残さず消えた。

「やりすぎかな」

経過壊しは笑う。イノケンティウスには、もうすでに新しい十字

架が持ち直されていた。

焦りが思考を鈍くさせる。

「も、もう一度――！」

昨夜の体から黒い霧が吹き出す。

しかし、イノケンティウスの十字架による爆発で、また無くなっ
てしまった。

「やはりか……くそ」

「まるで変わってないな」

「黙り……やがれ……」

レベルが上がらなければ、とてつもなく難しい戦いになる。もは
や、負け戦と言っても過言ではない。

黒い霧は広範囲に広げることの意味がある。十分な酸素と同じタ
イミングで吸わなければいけないからだ。

「一か八か、やるか。やってみるか」

そのまま吸う行為はとても危険だ。だが戸惑っている時間も無い。
手を口の中に入れる。そして能力を放出。簡単な作業だった。

ウィルスが体を浸食していく。

「ぶっ――！」

喉や鼻から、血が吹いた。

顔半分が真っ赤に染まる

経過壊しはそれを物珍しげに見つめていた。危害を加えるつもり
は無いようだ。

咳が酷くなる。

しかし頭の回転は早くなった。

昨夜の背中から黄金の翼が生える。

「決戦だ、クソ野郎」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6275t/>

とある二人は行動奪取[アウトパターン]

2011年10月29日07時09分発行